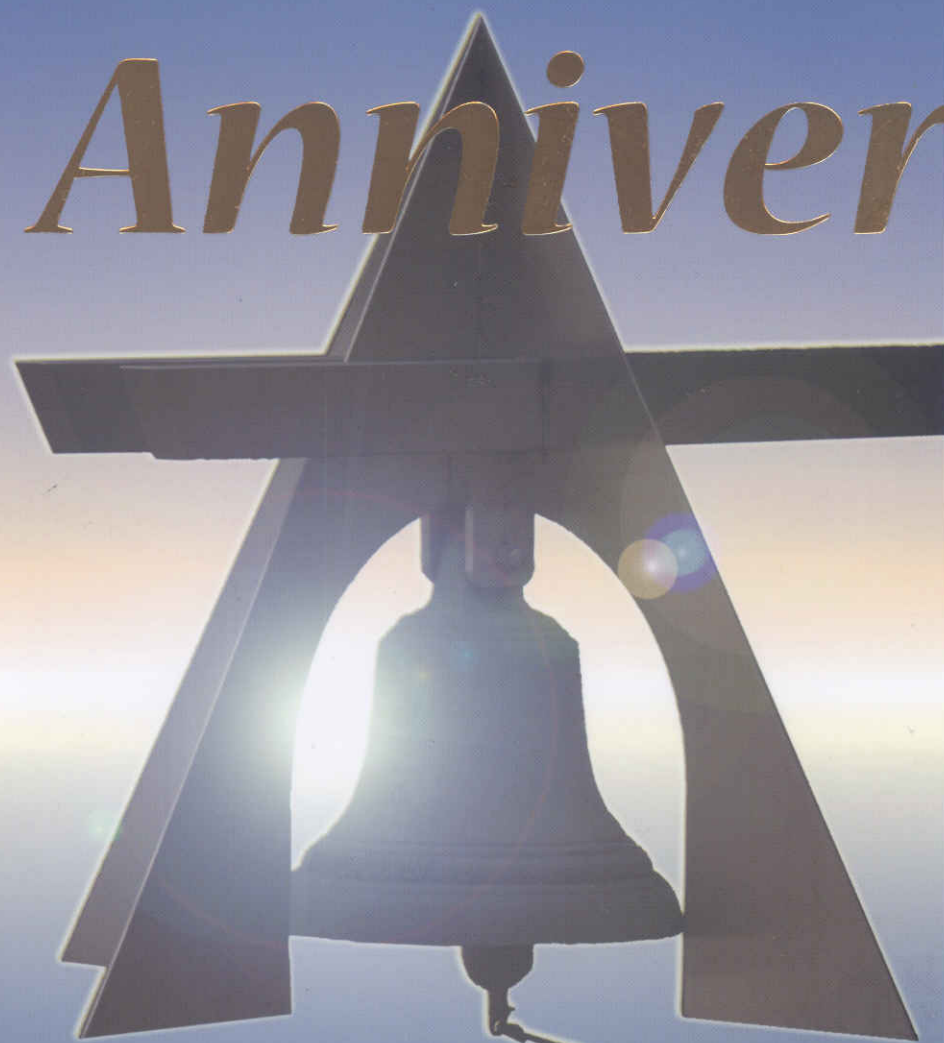


日新誌

VOL.16

50th

Anniversary



2009

“とどろ魁” 接点 50年!

甲府中学・甲府一高 創立129周年

東京同窓会50回記念

2009年7月11日(土) 於 東京會館

Boys be ambitious!
(William S. Clark)

山梨縣立甲府中學校校歌

三井 甲之 作詞
東京高等音樂學院 作曲



一、我等は日本に生まれたり

神の御代より一系の

皇統戴く我國に

生まれしことのうれしさよ

皇國の榮えは天地と

共に窮りなかるべし

二、大和島根に山めぐる

甲斐の國あり水清き

郷土の歴史顧みよ

我等の務め輕からず

見よや南に富士ヶ嶺は

皇國の鎮めと聳えたり

三、大海原の揺りやまぬ

波をも風をも凌ぎつつ

護れ皇國を諸共に

國民舉りて國のため

撓まず萎縮まず辟易がず

進むぞ大和ごころなる

山梨県立甲府第一高等学校校歌

昭和23年10月22日制定
上条 馨 作詞
小松 清 作曲

一、甲斐の国 みに建ちて

古へゆ 雄心伝へ

新しき 世の鑑とし

勉めてむ この学舎に

二、日に新た また日に新た

弥高き のぞみをもちて

真なる 理究め

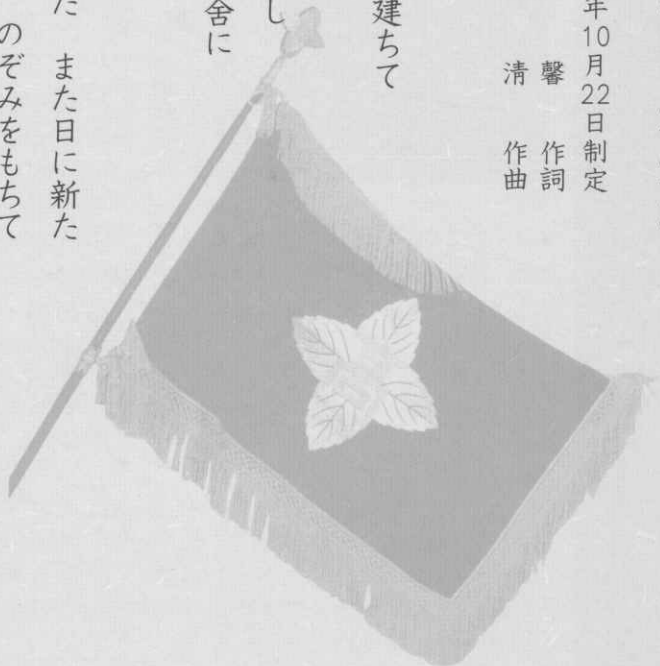
励みなむ 若人我等

三、聳え立つ 芙蓉の高根

清き哉 甲斐の山川

もろともに 玉と磨きて

賛くべし 天地の化育



50回記念 特別企画 記念誌の歩

第1号 1992年4月15日発行



発行責任者
石川 眞吾 (S29卒)

■タブロイド版4頁

92・4・15 東京同窓会、創刊第1号である。

広瀬校長、山本市長、渡辺日本勧業銀行顧問の祝辞、挨拶が巻頭を飾る。4面には母校だよりを載せ、新設計の校舎、卒業生の動向、甲府との

交流模様など充実した活動の現況を伝える。2、3頁は山日世論調査を基に日常生活の種々相を窺いデータ数字を挙げ解説を行っている。

サラリーマン家庭の懐事情、その中に占める教育費の比率、アンケートを添えて実態を示す等。子を持つ親の心情を、つまりは、卒業生達の往時回想の契機となっている。[母校の現在 (いま) を伝える]

又、小スペースながら誰もが気になる老後を項目立てし、見出しに「高齢化社会・女性に不安」を掲げる。広く波紋が広がるだろう。

おそらくは短期間に発行の意志決定が行われ、卒業生の寄稿依頼に時間的余裕が得られなかったと思われる。

しかし、以後継続されてゆく「同窓会だより」の第1号の意味は重く、礎となった編集者の活動には感謝と敬意を表したい。

第2号 1995年6月2日発行



発行責任者
伴野 匡 (S19卒)

■タブロイド版4頁

創刊号にひき続き、形式を踏襲している。

東京同窓会35周年を伝える趣旨に沿って、ヴァリエーションが豊富になった。

「女性ネットワーク」の発

足。会員消息。卒業生構成の日新会ゴルフ参加の呼びかけ、平成7年の同窓会開催。参加人数は380名に上り、盛会であった由、記事としている。初代日新鐘の写真と、その由来・解説が一面を飾るが卒業生共通のイメージ定着に貢献。在校時は耳にしているその余韻を各自改め反芻したい。

卒業後、多岐、多方面に互る活躍を追跡調査し、伝える為の視座が予感される。

井上氏の第80代警視総監就任。井尻氏の評論集の刊行そしてバリトン歌手平野氏のサロンコンサートのお知らせ、母校百周年記念館に於ける湛山翁の胸像除幕式などの紹介がその例である。

会員の主だった動向、消息が豊富に取り上げられてこそ、同窓会機関誌の意義が増す。楽しさが増す。

第9号 2002年7月12日発行



発行責任者
恩田 宗 (S27卒)

幹事長・編集責任者
飯島 善一郎 (S39卒)

■A4版 全28頁

「不安に満ちたまなざしを投げかける少女、私たちの17才の頃の表情を描いてみたかった…」作者吉岡美穂子氏

が語る少女像が表紙。青を基調にした少女の内面を描き出した優作。青春期にある若者の多くに共通する表情であり、その肖像は感銘を受ける。心の裡側に向けられた眼差しに照らし出される数々のシーン。海あり山あり難関を越えた昔の思いが重なる筈である。随筆作品集、アンソロジー風に編まれた一巻である。

又、コート紙を使用し、よく整理された編集は、格調も整い立派な器を形成した。後半の広告欄も興味深く読んだ。〇〇年卒、〇〇年卒。各号に云える事ではあるが、一国一城の主、大会社の要職を占め、功成り名遂げた卒業生諸氏の現況報告として丹念に読み取る価値を備え、情報を盛っている。広告欄は眼光紙背の心構えで読まれるべきかも知れない。

第10号 2003年7月11日発行



発行責任者
神山 茂 (S30卒)

幹事長・編集責任者
原 護 (S40卒)

■A4版 全40頁

フレスコ画を想わせる菊島氏特有の穏やかな色調は、夢の中の風景のように渺茫とした拡がりを感じさせ、阪本繁次郎や牛島憲之の

タブローにも似通い、幽玄な空間を描き出している。色相の恒久性追求か? 8 ポイント4段組みの編集は、レイアウトのお手本とも云うべきハイレベルの技術を示し、全頁、一分の隙もない見事な会報を制作した。映像の視覚効果が充分計量されていてビジュアルデザインの教本とも云える。おそらくは記念誌の最高レベルを示したのではないか。

「草のように樹のように」をキャッチフレーズに用いたが、尚、裏表紙には雲・山・風・雷を喩え、拡散する方向を転じて更にあなたのようにと求心的な展開を示している。主張は多種多様、近況報告であったり随想録であったりするが、何処かで表現の奥、意識の内部にも通底する山川草木への比喻。仏教思想では、木石の類いも衆生であり、山川草木との交感意識の垣根を取り外して初めて可能な境地を示す。それぞれの文章の背景に夥しい時間を費やしてきた感慨の深さがあり見て読んで快い一冊である。

第3号



校ではない。

拡大再生産

頁数を2頁

アジア開

とも呼ばれ、

の名選手、三

としてみても

開高健

者のプロフ

卒業女性

一六会のメ

年毎に内容

秀才、俊才

第11号



いる。曰く、言葉を交わし、の駅や雑踏のたる。

身を包む

お互い、言

していたり

甲府中、甲

年卒の新津

同窓会とす

それぞれの

えて、共通

橘田尚久

張感を張り

尚、ヘレン

する。

第3号 1996年7月3日 発行



発行責任者
伴野 匡(S19卒)

編集責任者
笠井 莞爾(S33卒)

■タブロイド版 6頁

「時空を超えて、580名が一堂に会す。」

70Qの大活字が紙幅一杯に踊る大見出し。

いかに盛況を呈したが、当日の感動を刻している。精鋭部隊の感慨を代弁する関口校長のコメント、母校はおふくろの味とか。

成る程、母校であって父

校ではない。反対に父祖の地と表現しても母の地とは云わぬ。

拡大再生産、おふくろの味は論理的帰結とも云える。

頁数を2頁増やし会員の消息欄も充実している。

アジア開発銀行総会出席の顛末。又、イチロー以前のイチローとも呼ばれ、一部、球界の消息通の間で取沙汰されていた米球界の名選手、三神氏の紹介。WBC連勝優勝の折からスクープ記事としてみても成功している労作である。

開高健賞受賞作品「神経症の時代」わがうちなる森田正馬」著者のプロフィールを伝え、受賞のメッセージも併せ記載している。卒業女性の会、一紅会の発足、「仲間たちはいま」、欄の拡大、一六会のメッセージ等々。

年毎に内容充実が目立ち成長の証しを見、編集の手際にはさすが、秀才、俊才の所業と感嘆する。

第4号 1997年7月2日 発行



発行責任者
伴野 匡(S19卒)

編集責任者
内藤 勲(S34卒)

■タブロイド版 8頁

東京同窓会開催、600余名の大集会を伝える一面の大見出し。文字級数は前号の70Qを超えて100Q、しかも長体がかけられ迫力充分。

両宮校長の謝辞。掲載枠内に須藤氏の山岳風景がカット代わりに掲げられている。清里だろうか？こちらも漠先生

と同窓の先輩、後輩。親子鷹の美術教師裏氏」である。美術分野に進んだ卒業生の感慨も如何ばかりかと拝察。

渡辺会長の挨拶文には「...世の中がグローバル化すればする程、個人、団体、地域社会の個性、アイデンティティの確立必要...」と主張されている。目先の急務は、同窓会だよりの充実を計り、スクールカラーの確認作業が必要と迄は言及されなかったが、大先輩の指摘の先には当然、その事をも含まれる筈である。

2、3面は強行遠足をテーマの座談会。新たに発足した一紅会入会への勧誘文。4、5面は新校舎落成に関する写真紹介。6、7面は同窓生のあの人この人欄の拡大。8面母校だより。一途な紙面充実。読み応えある記事が増え、母校はおふくろの味のみならず母校は兄弟、肉親の味ともなっている。

第11号 2004年7月9日 発行



幹事長
高木 悦子(S41卒)

編集後記者
K氏

■B5版 全36頁

和と連携を願っての同窓会。表紙の呼びかけが、意志を鮮明に伝えて

いる。曰く、「結び直そう同窓の絆」。おそらく学校時代、一言も言葉を交わした経験をもたない同期生達であったとしても、東京の駅や雑踏の中で出逢うと、ふっと一高生じゃないか？と思ひ当たる。

身を包む雰囲気か、旧知の何かを識別する。

お互い、言葉ではなく発信する様々な無声の情報を素早く交換していたりするのだろう。

甲府中、甲府一高の卒業生というプライドが最強の絆と昭和11卒の新津氏は呼びかける。お互いに命綱を握り合う確認の場が同窓会とすれば、共鳴は文字通り共鳴り、友成りであるだろう。それぞれの体験が生き活きと綴られているが、彼我の経験を越えて、共通、共有の財産となる。

橘田尚久氏の抽象画を表紙としているが、シャープな感覚と緊張感を張りめぐらせた画風は、会誌に風格を与えている。尚、ヘレン・ケラーの故事を引いた一文を用いた広告欄を再録する。

第12号 2005年7月8日 発行



幹事長
横澤 良次(S42卒)

編集長
中島 賢一(S42卒)

■B5版 全76頁

50年、100年、125年。

風雪に耐えて継続する歴史の節目、

人は束の間竹み、来し方、行く末に思いを凝らす。その感慨が今号には程良く生かされた編集となった。キャッチフレーズは「今 新たな同窓の詩」。

史料性豊かな貴重な写真と年表。昭和39年から昭和41年迄、県内外の主だった出来事を掲載し、話題性をもたせている。資料重視の編集は貴重。時代の潮流は、事件をモメントとする。常に意識の中心に置かれている訳ではないが、同時代性の枠の中に納まり活動している者には、直接の係り合いの有無はなくともその状況を呼吸している訳で、学校内の生活の外縁を可能な限り拡大した今号は、興味をそそられる。結び直す絆の確認が、広い面積に及び多くの人に及ぶ事を今更乍らに祈りたい。

尚、清水氏の表紙画は詩情を湛えた優作。「風景を求めて」展へ出品された由。優しく適確な描写が、風景画の魅力を十分に伝えている。

各年、編集者の意欲が熱気となって伝わってくる。就中、特集にはふむふむと頷くもの、オツと眼を見はるもの、思い当たる節あって、ニヤリとするもの等。又、スクープ記事に至っては、メディアの拡大を計り、広く天下に知らしめたいと思うものもあった。石に文字を刻すごとく、丹念に仕上げられた会報は、碑文、記念塔とも呼びたい屹立した存在となり、出色の出来栄である。そして、寄稿文のいずれにも、甲中、一高に学んだ同窓生の心意気と生命の讃歌が満ち溢れている。タイトルとした由縁である。

紙のエピタフ或は紙のモニュメント

そしてオマージュ

東京同窓会設立から50回目を迎える。各年度の当番幹事がテーマを決め、趣向を凝らし、盛会を願ってアレンジメントを行い、記念誌を刊行してきた。50年を一区切り、ここに全紙をテーマブル化、紹介することにした。

第5号 1998年7月8日発行



発行責任者
伴野 匡(S19卒)
編集責任者
田中 友昭(S35卒)

■タブロイド版 10頁

創刊号以来のタブロイド判新聞形式を守り、刊行された当号。

歌人、河野道工氏の半生を映画化した、その折のスチール写真を配した構成を特色にしている。河野氏は市川大門在住ではあるが、本校に直接の縁はなかった。しかし、ご子息が一高入学を果たし、映画にも口ケ地となった本校の校舎、講堂などが描写されている。

又、故郷の山河を紹介する記事と写真は、東京在住の同窓生にとってのサービス。

車窓から見える山々の紹介、県内各紙でお馴染み、山村正光氏が、甲州20名山を選び健筆を揮っている。山岳部ならずとも、つまり、全卒業生の眼裏には四季折々の山の表情が焼き付いているだろう。

眼福、有難く、楽しい特集であった。

更に、甲府今昔、「この場所、あの人、あんなこと」ボロ電や駅前広場、映画館、武田神社参道。それも桜の並木が土道を覆うように枝を差し交わしている花のトンネル風景等々。懐旧の念を抑え難い貴重な写真を掲載している。

後年、山日から「山梨今昔」「甲府今昔」などが上梓されたが、再録された共通のシーン、共通のネタもあった。

一タ、同窓生が寄り集まり、山梨の今昔を語るには十分な紙面作りであった。印刷インクのセピアもノスタルジックな効果を挙げている。

第13号 2006年7月8日発行



幹事長
池田 秀雄(S43卒)
編集長
大野 陽造(S43卒)

■A4版 全72頁

A4版復活、面目一新の表紙。強行遠足、出発の瞬間を捉えたショットは臨場感に溢れ、暫し懐旧の情を抱く。編集も意欲的、謝

恩塔に万葉の桜を配した扉写真、駅北、山日文化会館を前景に甲斐駒、南アルプスを遠景に、黄昏迫る一瞬の静寂な盆地夕景。目次下の笠被り富士も鮮やか。ここには、他郷に在っても忘れる事のない情景が納められている。

内容も豊富。男女共学の歴史を語るに当事者のOGを集めての座談会。話題も多岐に亘り記念碑的な紙面作りが成功した。

又、一高精神を問う野球譚、蘇生編は年毎に弱体化する運動各部への活性剤となるだろうか？

かつては、文武両道を謳歌した一高。その衰退を進学専門校と路線変更に理由づける事は簡単である。しかし、実態はそう簡単に片付けられない。果たして蘇生はなるか？

「雄心伝え」ジャズドラマー森山威男氏の紹介、三高千恵子医師の紹介は貴重な頁となった。

第6号 1999年7月10日発行



発行責任者
伴野 匡(S19卒)
編集責任者
土川 俊雄(S36卒)

■タブロイド版 10頁

前号までの編集パターンを踏襲してはいるが、今流にカラー印刷である。

若尾氏のペン画がユニークで楽しい。一見、気まぐれな早いタッチではあるが、化粧の濃い女性達の風俗描写には遊びがあり、その寓意性も含めて面白可笑しい。ニューヨークを中心に

した国際的な活躍がめざましい。無数の穴を穿った彫刻作品ビッグアップルの作者、佐藤正明氏と同様注目される美術家である。

扱、今号のテーマは「いい日会い」

渡辺校長、海沼会長、奥石校長の寄稿は、祝辞の中に一高の近況も盛られており、確かな足取り、健やかな発展が憶われる。

「わが青春の回顧録」の寄せ書きは、部活、強行遠足、大戦直前のキナ臭い時代環境の思い出。山岳登山、愛宕山の集会等々。多種多彩。「写真で読む甲府今昔物語」は、おそらく前号好評で、会員からのリクエストがあつてのことだろう。アンコールと云おうか、拾遺集の感もあり、望郷の念いや増す…である。

冒頭に置かれた緒方和子氏の感想文は、一人緒方氏に止まらず多くの卒業生の共感を呼ぶであろう。

第14号 2007年7月21日発行



幹事長
清水 昭(S44卒)
編集後記者
芳賀 直行(S44卒)

■タブロイド版 22頁

冊子形式には冊子形式の、新聞形式には新聞形式の特性がある。記念誌は冊子形式優先と思う処だが、22頁の今号には、伸びやかな

配列が生かされていて、魅力ある編集となった。下半分は広告欄になるが、戦前卒の大先輩へのインタビュー。堀内先生へのインタビューをはじめ歴代恩師の取材は、文字通り師の警咳に触れる思いに懐かしさがこみ上げてくる。会心の企画。

一紅会も発足以来10年、初代・二代会長の寄稿文を掲載。年毎に女性会員の増加する様子を伝えているのも嬉しい。更に記念講演会の設営は一紅会の大きな功績で、今後は記念講演の記録を成文化し、多くの卒業生に頒布することも考えて欲しい。又、クラブ活動の思い出は応援団も含め16名が寄稿している。壮観である。又、遠距離通学の思い出を語る卒業生もあり境遇の違いを改めて認識し、至近距離から通学する者には某かの教訓が響く。

又、母校沿革は、編年史として毎号連載の欲しいところである。

第7号 2000年7月14日発行



発行責任者
伴野 匡 (S19卒)

編集責任者
雨宮 忠 (S37卒)

■A4版 全28頁

平成12年は、母校120周年を迎え、祝の記念誌となっている。東京同窓会長、渡辺氏、全同窓

会長、井上氏、興石校長、一紅会会長、五十嵐女史のメッセージを掲載。

「新しいチャレンジ」をメインテーマとして過去、現在の活動を報告、同窓会員の多数寄稿を得た。

勿論、クラーク博士の Boys, be ambitious にレリーズするチャレンジである事は、今更、説明する迄もなく、時代の地平を切り拓く志こそ尊しとする精神である。

湛山翁の若き日を長男湛一氏が、チャレンジ時代として語る記事。大島正健校長より薫陶を受けた生徒達のその後の行動に指導精神の血脈を見て取る記事等々。興趣を盛り上げて印象深い。イチロー以前のイチローと云われる三神氏の渡米、以後米球界活躍の紹介記事は注目。人脈記、人物風土記としてまとめれば、大部作になるだろう。興味が湧いてくる。

尚、表紙画は清水勲氏作。色彩豊かリズム感に溢れ、楽しい仕上がりである。

第8号 2001年7月13日発行



発行責任者
恩田 宗 (S27卒)

編集責任者
武内 紘司 (S38卒)

■A4版 全28頁

水彩による点描法。花畑のイメージが印象される。水彩特有の透明感が詩情を誘う。

甘くならないのは具象からの昇華の過程が読み取れる故か、表紙として用いたところは少々意表を衝く。

2001年、21世紀初。メインテーマは「新世紀共生の時代へ」。環境、教育、人権、医療、老人福祉、都市計画、国際理解と協力等々。

共生を軸とした論旨を専門的立場から多くの卒業生会員に執筆依頼を行い、広く深い考察と提言が得られた。もし、この他に人口問題を取り扱う専門家、識者を加え、シンポジウム、パネルディスカッションが企画されたなら、特筆すべきイベントになったであろう。21世紀の主要問題のほぼ全域をカバーするテーマを採り上げている訳で、その意見交換は向後の指針となるからである。

会員一人一人がこれらの主張をヒントに現況を認識し、考えを進める事は更に重要。

その為にも発展的な読み取りおすすめである。

第15号 2008年7月26日発行



幹事長
設楽 久敬 (S45卒)

編集責任者
山下 昌彦 (S45卒)

■A4版 全72頁

表紙はスタジアムのスタンド。裸足の応援団長の制服姿、フルートを奏する麦藁帽子の女生徒達。熱

気が、歓声がビートとなって伝わってくる。太陽に向かってカットと花片を開いた向日葵の群落写真を背景に学校生活を謳った詩を掲げた扉頁。象徴性豊か見事な出来栄である。創立128年を刻む、東京同窓会記念誌。強行遠足の出発写真。旧日新鐘を迎角で捉えた写真、そのどれもが表紙となるにふさわしい写真の多用は、インパクトがあり編集スタッフの意欲の表れを高く評価すべきであろう。

「昔日の甲府」はアルバム風にまとめさしすめクリーンヒット。

一紅会、春の後援会「老いを科学する」講師に田沼靖一氏、東京理科大学薬学部教授。恒例となった一紅会の定期講演会は、生活に即した宗教、科学、文化全般に亘り、専門家を招聘した教養講座であり、捻り多い企画である。特集記事も盛り沢山。一挙に収録枚数も増え、充実した一冊となった。

第16号 2009年7月11日発行



幹事長
中嶋 文夫 (S46卒)

編集責任者
西野 公子 (S46卒)

■A4版 全80頁

甲中・一高、かつてそこは汗と涙を封じ込めた青春の宝箱そして今、心のどこかにある一高という名の誇りが新たな感動を伴う宝箱をひらく鍵となる

本日、会場でそれぞれの鍵を手にした皆様にお会い出来ることをスタッフ一同、喜びと致しております。

「50年目って新たな夜明けって感じ」「俺たちが小学校1年の時、東京同窓会発足。これ運命だよ」「なぜなの?」「小学校ってのは社会への第一歩だ。時を同じくして先輩方が東京での受け皿を作ってくれていたんだ」「だから今回我々が当番幹事ってのは運命だな」「いや、運命じゃない」「じゃあ、何だって言うんだ」「俺たちはついてるんだよ。1回目は総合選抜一期生、くじで一高生になったろ。2回目は50回記念の当番幹事だろ」「てことは3回目もあるの?」「あるサ。誰か100周年の祝辞を言ってくれ。『50年前、当番幹事をいたしましたアァ106歳になった俺たちはあ、ほんまに一、ついてるー!』って」

甲府中学・甲府一高 創立129周年
2009東京同窓会記念誌

日新鐘



画『帯名山』作者 久保田 二雄（昭和37年卒）

“ さきがけ
魁 接点 50年！ ”

時代に先駆けて礎を作った先輩諸氏に敬意と感謝をこめて
当番幹事46年卒

今日は一高の同窓会

きょうは一高の同窓会だから
万障くり合わせて出席しよう
参加の仲間を姿見に

きのうと違う自分が写る

ぼくに貴女が映る

きみにぼくがうつる

貴女にあなたがうつる

ライブニッツの单子論は モナド

きょうぼくらにとって精巧な比喻となる

宇宙に吊り下がるミラー・ボール

個に全が映り 全に個が映る

南十字星下のカフカと呼ばれた

アルゼンチンのボルフェスが云った

人類は一人の不死の人である と

一高に学んだ全員が

一本の不滅の大樹であると

そんなふうについてみたい

枝を繁らせ根を肥らせ確かな年輪を刻む縄文杉のように

アインシュタインが云い残した

学校で学んだ全てを忘れても

あとに残る何ものか それが教育だと



本館前庭東部 東京同窓会寄贈

何故かホッと安心する あのカイ時間

蒼の翳りに明滅するスピリチュアルな定数

昭和の懐におさめられた盆地の風景

北の縁の三階建て校舎は僕らにとつての解放区

日新鐘の鳴りわたる 日毎日毎が祝祭の空間

恩師の指先に読み取れる「賛天地之化育」

曹洞宗の鼻祖 道元が戒告

山河の親切 我が知なくば 一知半解あるべからず

おお眞の叡智よ ぼくらを導け

事象に潜む 眞理の前に

きようは一高の同窓会

オーケストラのように集り

ジグソー・パズルのように語り合おう

あなたが切り拓いた新たな地平

きみが登攀 君が懸垂下降

そして貴女が編み上げた暮らしの中に

揺れる一輪のバラ

シヨナサンが探る飛翔のフィロソフィ

魁^{さきがけ}ることへのひたすらな勇氣

歴史の経系に己の緯系を織り込もう

はるかな未来を見つめる自分が

日新の鐘を鳴らし続ける姿に染めぬかれる

今日は一高の同窓会



「日新鐘」に寄せて

東京同窓会会長 井上幸彦
(昭和三十一年卒)



今年の東京同窓会は、五十回目という節目を迎えることとなった。これまで途切れることなく回を重ねることができたのは、当番

幹事制が定着し、当該学年幹事が、受け継がれて来た灯を消すまいと同級生等の消息を掘り起こし、イベント等に知恵を絞り、真剣に取り組んできたからに他ならない。

それに何よりも甲府中学、甲府一高に学んだものとしてその伝統を正しく受け継ぎ、発展させていこうとの一高男児（女兒？）の心意気の現れと言ってよいであろう。

これまでの先輩諸兄弟姉のご努力に心から敬意を表すものである。

今年は、五十回目ということで初めて、総会の後「講演会」を開催することとなった。当番幹事のご苦勞によって、御歳九十八歳で、尚現役として活躍中の日野原重明先生に講師をお引き受けいただいた。

これも今後の同窓会の在り方を占う試金石となるであろう。

五十回を数える節目の年の同窓会が、今後の同窓会の継続と発展の大きな礎石となることを念じつつ当日の盛り上がり方を期待する次第である。



ごあいさつ

甲府第一高等学校校長 跡部 和
(昭和四四年卒)



平成二十一年度甲府中学校・甲府第一高等学校東京同窓会が盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、東京同窓

会の皆様には日頃より本校発展のために多大なる御支援と御協力をいただき心より感謝申し上げます。

新しい高校入試制度実施から三年が経過し、今年度も一高の校風を慕って、意欲溢れる二八一名の生徒が入学してきました。

昨年度は進学面において、東大二名、阪大医・医一名、梨大医・医二名などを始め、京大、東北大、千葉大、お茶大、東外大、自治医大、早大など、例年以上の成果をあげることができましたが、国立公立全体の合格者数ではまだまだ伸びる余地があります。

本校の特色は、個人、学校全体ともに、そのキャパシティの大きさにあると思います。「文化の香りのする、懐の深い進学校」を目指し、進学実績のより一層の向上、芸術・文化、スポーツの活性化に力を注ぐとともに広報活動も積極的に推進したいと考えております。

の皆様には、変わらぬ御支援、御協力をお願いするとともに、益々の御発展と御健勝を祈念しまして挨拶いたします。



東京同窓会五十年目の節目を迎えるにあたり

平成二十一年度幹事長 中嶋文夫
(昭和四六年卒)



本日ご出席の同窓の皆様、この「日新鐘」に現在の経済状況の中、広告の協賛及び物心両面でご支援いただきました皆様は幹事団一同御礼を申し上げます。

本年は「魁 接点 五十年」をテーマといたしました。本日、五十回目の甲府中学・甲府一高東京同窓会が開催されますのも、一重に、先輩諸兄弟姉が築き上げてこられた「信頼」という絆に依る関係各位のご協力の賜物であります。そして、その中で私たち四十六年会は「生かされ」同窓会の企画を楽しませて頂きました。重ねて、御礼を申し上げます。

本日の同窓会は五十年記念として、「石橋湛山先生と私&生涯現役一〇〇歳を生きる」をテーマに日野原重明先生に記念講演を行っていただき、そして懇親会においては、諸兄五感の演出と進行として、本校の山々を映し出し、思ひ出の「日新食堂」と銘打ち、かつての学食メニューを再現し、同県出身でもある、「信田和雄バンド」のオールディーズ演奏を、客席の音響を考慮した計画での、思ひ出の楽曲を楽しんでいただきます。

温故知新による向上心、そして栄光の軌跡を築き上げた先輩諸兄弟姉に敬意を表すると共に旧交を温められる内容を「風林火山」の心意気で運営して参ります。そして、四十六年会が企画運営を通じて味わった感動を次年度会へ繋ぐことができれば、これに勝る喜びはございません。どうぞ皆様、お楽しみ下さい。



“^{さきがけ}魁 接点 50年!”

甲府中学・甲府一高 創立129周年
2009東京同窓会記念誌

日新鐘

CONTENTS

- 甲府中学・甲府一高校歌 …… 1
- 50回記念 特別企画 記念紙の歩み …… 3
- 今日は一高の同窓会 …… 10
- ご挨拶 …… 12
- 東京同窓会50年の歩み …… 14
- 50回記念講演 …… 20
- 三世代インタビュー …… 22
- 50年前の強行遠足 …… 27
- 卒業生50人に聞く …… 30
- 歴代記念誌・一部内容紹介 …… 33
- 一紅会講演会〈いま・ここ〉を離れて …… 38
- 総会資料 …… 42
- 広告目次 …… 52
- 扉絵作者・編集スタッフのひとりごと …… 71

表紙デザイン: 田中 司
巻頭詩: 松野 互 (昭和46年卒)

50th Anniversary

東京同窓会50年の歩み

甲一の沿革・世相・流行語

一九六〇
(昭和35年)
●東京同窓会発足 五月
上野精養軒で石橋元首相を迎えて
結成大会開催



一九六一
(昭和36年)

●日新ホール落成
ソ連初の人工衛星打ち上げ

一九六二
(昭和37年)

東洋一若戸大橋開通
(流)ハイそれまでよ

一九六三
(昭和38年)

ケネディー大統領暗殺
名神高速道路開通

一九六四
(昭和39年)

東海道新幹線開通
第十八回五輪東京大会
(流)ウルトラC

一九六五
(昭和40年)

「校是」
荀日新 日日新 又新
(日に新たに真理を探究する)

一九六六
(昭和41年)

賛天地之化育
(自然の法に遵い人間愛に生る)

一九六七
(昭和42年)

(流)ミニスカート

ビートルズ来日

コンクリート造新館教室落成
初のプロ野球ドラフト会議開催

●第一回東京同窓会

「石橋湛山先生は
奥様に抱えられるようにして入場された」

臨場感あふれる立川孝幸氏(昭和一七年卒)の言葉に、我々はすっかり引き込まれ、心は昭和三五年五月第一回東京同窓会が開催された上野精養軒に飛んでいた。

東京同窓会五〇年を振り返るのに第一回は絶対にはずせない……と意気込んだものの、当時を知る人の手がかりがほとんどなく、企画が頓挫しそうになった時、同窓会役員会でこの人ならと推薦してくれたのが、立川氏である。当時の役員名簿、出席者、広告依頼などの関係資料をテーブルいっぱい広げながら、東京同窓会誕生秘話やその後の歴史の一端を話してくださったのだが、とりわけ、黄ばんで、手で触れたらばらばらになってしまいうる「第一回同窓会だより」には目を見張った。「東京同窓会盛大な出発」「上野の森に鶴城の歌」

「東都の実力者スラリ」といった見出しに続いて、次のように記されている。



初代会長の森武臣氏はご逝去されて、当時のご苦労や感激を直接お聞きする術はないが、この記事のほんの何行かからでも、同窓会結成の高揚感が十分すぎるほどかがえる。ちなみに、女性参加数が増えるに従い、上野の森では閉会後の女性の帰り道があぶないのではとの意見が出始め、会場を東武銀座ホテルに移し、その後現在の東京会館になったとの由。そんな立川氏の細かいエピソードの一つ一つに心を打たれつつ、決起当時の先輩諸氏の心意気に尊敬の念を新たにしたのであった。

※20～21頁に石橋湛山先生の関連記事あり



当時を魅力的に語る立川孝幸氏

一九六八
(昭和43年)一九六九
(昭和44年)一九七〇
(昭和45年)一九七一
(昭和46年)一九七二
(昭和47年)一九七三
(昭和48年)一九七四
(昭和49年)一九七五
(昭和50年)一九七六
(昭和51年)

「校是」
Be Gentleman (紳士たれ)
Boys be Ambitious
(高遠な理想のもとに平常の
実践に努める)



● 本館前庭園完成 寄贈



● 甲府一・甲府南間総合選抜実施

● 三度目の甲子園出場

初の心臓移植



東名高速道路全線開通
アポロ十一号月面着陸

創立九十周年記念式典
大阪万国博開幕

(流)ウーマンリブ

東京銀座にマック一号店オープン

コンクリート造四階建北館一次分
完成 冬季五輪札幌大会
バンダ上野動物園へ

石油ショック
(流)省エネ



定時制・通信制課程廃止
連続企業爆破事件一号
(流)ベルばら

甲府一・甲府南・甲府二間
総合選抜実施
山陽新幹線開業

第二グラウンド・女子更衣室完成
国内初の五つ子誕生

関連記事は8ページ下段

● 総合選抜と信田和雄氏

信田和雄氏は、「寺内タケシとブルー
ジーンズ」のキーボード奏者であり、
自らも「A.B.S」を始めとするバン
ドを率いるミュージシャンである。今
回の東京同窓会懇親会で団塊の世代懐
かしのオールディーズを演奏する、そ
の信田氏が総合選抜とどんな関係があ
るのか首をかしげる人も多いだろう。

実は、我々当番幹事四十六年卒は、
総合選抜第一期生である。晴れて甲府
一高に入学したものの、上級生からは
「クジ入」と呼ばれ、先生方からも、
ある意味、一目置かれ、一高生であつ
て一高生ではないかのように思われて
いた「初代総合選抜」である。我々が
遭遇した総合選抜にまつわる悲喜こも
ごもを綴り、さらに全国で最後に制度
が廃止になった今、いったい山梨の教
育にとって総合選抜はどんな意味を
持っていたのかを検証したら、それこ
そ一冊の本になってしまいそうなの
で、ここは後進に譲るとしよう。

さて、当時の対象校は甲府一高と甲
府南高の二校で、信田氏は南高四十六
年卒、つまり我々の同窓生になってい
たかもしれない同級生である。彼は南
高を卒業した後、BOYS BE
AMBITIOUSの本場、北海道大学法
学部に進学し、得意のピアノを生かし

てプロのミュージシャンの道を進ん
だ。その後、三十二才の頃、あのギタ
リストの寺内タケシ氏に出会ってバン
ド活動をともにし、ゆるぎない人気を
博しているのは皆さんご存知の通りで
あらう。

今回、信田氏に出演を依頼したのは、
もちろん、その知名度の高さゆえとい
うこともあるが、離れ離れになった中
学の同級生たちの声に動かされたから
である。

ともに初代総合選抜としての誇り
を持ち、初代総合選抜として同じ舞台に
立とうという熱い思いが、七月十一日、
ここ東京會館で結実する。



ステージから挨拶する信田氏

（昭和53年）

一九七九
(昭和54年)

一九八〇
(昭和55年)

（昭和56年）一九八一

（昭和57年）

一九八三
(昭和58年)

一九八四
(昭和59年)

一九八五
(昭和60年)



甲府一・甲府南・甲府二・甲府東間
総合選抜実施
(流)カラオケブーム

● 成田空港開港
(流)窓際族

共通一次試験実施
東京サミット

創立百周年記念式典
(流)ルービックキューブ

●創立百周年記念館竣工記念式典
スペースシャトル打上げ

東北・上越新幹線開通

東京デイズニーランド開園



六・二五上野精養軒

三〇九名



六·一四上野精養軒

三三九名

強行遠足六十周年「記念像」完成
科学万博つくば開催

— 甲府 —

今年の当番幹事四十六年卒は、総合選抜一期生です。一高へ振り分けられて幸福を感じた一つに、入学した年の甲子園出場があります。

全国中学野球大会に始まる高校球史上、甲子園本大会へは、たった三度しか出場をはたしていません。昭和十年、甲府中学時代。昭和三十六年。そして私たち一年時の昭和四三年です。勿論、当時の三年、二年の先輩に連れて行ってもらった形ですが、山梨県大会の一回戦、二回戦、準決勝と怪我をした先輩に変わり、一年生でただ一人先発出場をはたし、先輩方の卒業後、主将として野球部を率いた石川君に寄稿を依頼すべく久しぶりに甲府を訪ねました。城東で「割烹石川」を営んでいる彼は板場で大きな魚を捌いているところでした。

第五十回全国高等学校野球選手権大会山梨県大会

都	留	5	—	4	川
吉	高	9	—	0	大
田	付	2	—	0	月
大	和	6	—	1	短
石	誠	10	—	9	留
日	崎	2	—	3	和
帝	京	3	—	1	崎
菲	三	5	—	4	京
谷	工	7	—	0	三
甲	村	7	—	0	村
峡	北	5	—	3	北
市	川	9	—	0	川
二 回 戦					
吉	高	9	—	2	大
田	南	3	—	2	月
峡	誠	4	—	1	短
日	工	4	—	1	留
甲	工	5	—	2	和
機	山	5	—	1	崎
菲	崎	5	—	1	京
甲	府	8	—	0	三
	川	4	—	0	村
三 回 戦					
吉	高	3	—	1	峡
日	誠	5	—	3	甲
機	工	8	—	0	府
甲	山	10	—	7	崎
	府				市
準 決 勝					
吉	高	5	—	1	日
甲	一	5	—	0	大
	府	5	—	1	機
					山
					工
					明
					誠
					工

決勝戦 甲府 1-0 吉田高

吉田高	甲府一
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	1
0	1

メンバー表

甲府一	吉田高
1望月幸	1高橋
2小沢	2高村
3野中	3広瀬久
4田中	4羽田
5露木	5渡辺
6斉藤	6小高
7遠藤	7上嶋
8望月敏	8柏木
9日向	9中山

甲子園記念大会

回戦 甲府第一高校対浜田高校(島根代表)

決勝戰 浜

浜田	甲府
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	1
1	0
0	0
1	0
2	1



一九八六
(昭和61年) 六・二上野精養軒 三四八名
会則制定

一九八七
(昭和62年) 六・九上野精養軒 四〇〇超名

一九八八
(昭和63年) 六・二五上野精養軒

一九八九
(昭和64年) 六・五上野精養軒 三二九名(女性一一名)
ゴルフ会(日新会)発足

一九九〇
(平成2年) 六・一八上野精養軒 四〇四名(女性二八名)

一九九一
(平成3年) 六・二二上野精養軒 三五三名
母校に書籍代寄付

一九九二
(平成4年) 六・二一上野精養軒 二九一名(女性三五名)
母校改築に寄付金協力

一九九三
(平成5年) 六・一七上野精養軒 一三九名(女性一六名)

一九九四
(平成6年) 六・一七上野精養軒 二九四名(女性一六名)
日新鐘第一号発刊

校歌碑完成
日本初の女性党首(社会党)
(流)財テク

国鉄民営化新社発足
(流)マルサ

青函トンネル開業
瀬戸大橋開通

弓道場完成
昭和天皇崩御
消費税3%実施

創立百十周年記念式典
大学入試センター試験実施
統一ドイツ誕生

英語科設立
ハイビジョン試験放送開始

屋外プール完成
(流)若貴ブーム

●新校舎落成
皇太子殿下結婚の儀

石橋湛山胸像設置
日新館完成



記憶のスクリーンに映る 甲子園

石川 俊和 (昭和46年卒)

柳刃とも呼ばれる刺身包丁は、繊細な切れ味を必要とする。刃立ちいかんで特に鮪の味わいは変わる。切れ味が悪いと切り口の細胞が押し潰されて酸化し舌触りが悪くなるとは科学的説明である。

低迷の政治、未曾有の不景気とマスコミ論説者は苦言を呈することはできてもヴィジョンを示すことはできない。やはり三十年前の景気低迷期に繊維業を営む家業を閉め、板前の修業に出た。その料亭の花板は云う「時間も風も斬れる刃に研ぎ上げろ」

何年経っても例えの突飛さに小首をかしげる。今日も意味を探りながら研いでいる。

食材を整えバランスを計り、品書きを作る。慣れた調理の作業とは異なり、思考活動は迷走する。何を書いたらいいのか。東京同窓会記念誌編集者から依頼されたテーマは、高校一年時の甲子園出場の違いである。

砥石に水を垂らしながら、記憶の彼方を探る。

まず高校受験間際に改正された受験システムⅡ総合選抜。合格後、

本人の意思や居住地に係らず一高か南校に振り分けられる。高校野球に憧れて、甲府東中時代を野球にあげくれた自分にとって、理不尽極まりない改変。南校に野球部はない。ならば工業か商業へ志望校を変えればいいのだが、一高で野球をやったからのである。一高野球部には、東中の先輩がいる。二年上の斉藤さん、後に慶応大学の野球部で活躍された望月敏さんは同じポジションだった。

一高合格を確認した際も、両親への報告より先に野球部の先輩に喜びの一報をいれた。翌日から練習へ参加していいと云う。入学前の春休みだった。

校章が異彩を放つ校舎の佇まいは、恐ろしく威厳があり、大人の世界に入って行くんだと身がすくんだ。

新三年生四人、新二年生五人、あまりにも小世帯に驚いた。中学の野球部でさえ五十人は下らない。雲の上の存在である三年生には口もきけなかったが、本来威張り散らすはずの二年生のやさしさに驚いた。球拾いなど雑用をこなす数少ない新入部員を、確保しておきたいという涙ぐましい自制心と努力の賜物とは後で知った。その春の練

一九九五
(平成7年)六・二銀座東武店
三・四二名(女性一六名)
縦の交流 女性部会発足創立百十五周年記念式典
阪神大震災
(流)マインドコントロール一九九六
(平成8年)七・三東京會館
五・二五名(女性八三名)
一紅会発足 基金募集

衆議院選挙(小選挙区比例代表制)

一九九七
(平成9年)七・二東京會館
五・三四名(女性一〇一名)
テーマ「夢みつづけて」強行遠足七十周年記念誌発刊
長野新幹線開業一九九八
(平成10年)七・八東京會館
五・三一名(女性一〇二名)
テーマ「メモリーズオブユー」長野冬季オリンピック
(流)キレル一九九九
(平成11年)七・一〇東京會館
四・六八名(女性九二名)
テーマ「いい日出会い」

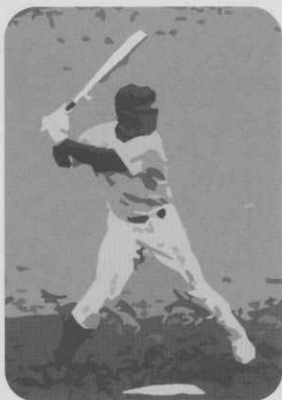
朱鷺の雛誕生(佐渡)

二〇〇〇
(平成12年)七・二四東京會館
五・〇五名(女性九二名)
テーマ「今新たなチャレンジ」フーバー高と姉妹校締結
創立百二十周年記念式典
有珠山噴火 (流)IT革命二〇〇一
(平成13年)七・二三東京會館
四・七〇名(女性八五名)
テーマ「新世紀共生の時代へ」米国で同時テロ
(流)抵抗勢力二〇〇二
(平成14年)七・二二東京會館
四・六二名(女性七八名)
テーマ「改革そして未来」拉致の5人帰国
(流)拉致 ビミョー二〇〇三
(平成15年)七・二一東京會館
四・九五名(女性一〇五名)
テーマ「草のように樹のように」自衛隊先遣隊イラクに派遣
(流)ばかりの壁

習中、用務員室のテレビで春の甲子園

選抜大会の入場行進を全員、三列横隊
でといつても入学前の新一年生は私と
組沢君の二人きりだった。が、正座して
見た。望月幸一郎主将から「夏は俺た
ちが甲子園で入場行進できるよう必死
で練習しよう」悲壮な決意。この時、
先輩に対する畏敬の念が芽生えた。新一年生も五人に増え、意気揚々と
県外の名門校へ乗り込む。練習試合前
のウォーミングアップ。総勢十四人の
一高野球部。相手校約百五〇人。四列
縦隊でランニングする野球部員に対し
羨望と屈辱に似た眼差しを帽子のつば
で隠す。部員数の対比に反し連勝につ
ぐ連勝。先輩達の姿に一騎当千の文字
が重なる。県大会を勝ち抜き、憧れの一高野球
部員として甲子園の入場行進を許され
た。あの用務員室から僅か四ヶ月半後
のことである。

人会の皆様の贈り物である。

本大会一回戦での惜敗。帰甲した駅
前での温かな出迎え。すべてが懐かし
い思い出。なぜか青春と呼ばれる時期
にあって、一高野球部のシーンだけは
鮮やかに甦る。過ぎ去った時間をまる
で触れただけで斬れる柳刃で輪切りに
したようにである。そしてその中にい
る先輩達は、風を切り裂いて白球を追
う。あこがれの勇姿である。アルプススタンドにどよめく歓声、
瞬間瞬間に方向を変える気まぐれな
風。汗と涙、そして祈り。一つ一つ、
記憶の細胞を押し潰すことなく原状を
復元し検索し、そこに在った本来の意
味を取り出し、いわば過去を完成する
ことができるならば、その置かれた
位置、立った位置から歴史の一場面を、
確かな一瞬を永遠のように生きたのだ
と云えるだろう。今夜も真心を尽くし、精一杯の舟盛
りを膳立てする。

二〇〇四
(平成16年)

七・九東京會館

二八九名(女性七九名)
テーマ「結び直そう同窓の絆」二〇〇五
(平成17年)

七・八東京會館

四七一
名
テーマ「今新たなり同窓の詩」二〇〇六
(平成18年)

七・八東京會館

五三七
名
テーマ「甦れ 鶴城魂」二〇〇七
(平成19年)

七・二一東京會館

五九一
名
テーマ「縦横織りなす絆」二〇〇八
(平成20年)

七・二六東京會館

五二八
名
テーマ「Our Good Days」二〇〇九
(平成21年)

七・二一東京會館

五二八
名
テーマ「魁接点50年」

Super English Language

High-school に指定される
新潟中越地震

グラント南側防球ネット設置

郵政民営化関連法成立
耐震強度偽装問題二学期制へ移行
WBC王ジャパン優勝総合選抜から全県一区入試へ移行
消えた年金問題

ノーベル賞日本人四人受賞

(資料提供)

立川 孝幸氏・山本 仁二氏

甲府中学校・甲府一高

「百年のあゆみ」

一紅会の歩みと将来

一紅会初代会長 渡邊 圭子 (昭和28年卒)

平成七年東京同窓会の活性化を、特に多くの女性に参加してほしいという要請のもとに、女性ネットワークの会が設立されました。同期の男性幹事からの電話で各学年の女性代表が集まる会に参加して下さい、と呼びかけられ断り下手な私はOKの返事をしたのが十四年前、以後「一紅会」に微力ながらかわり続けることになりました。

平成八年九月にかけ女性代表の方々の真摯な努力により会の名前も甲府一高の「一」、女性制服の蝶ネクタイの赤色からのイメージで「一紅会」と付けられ、会則も検討を重ねた後承認され、次々形がととのってゆきました。

平成十年には東京同窓会副会長の一人として「一紅会」会長が就任することがきまったのです。それから、特に一紅会独自の活動として新春講演会が毎年おこなわれているのは「女性力」の結実と声大きく報告したいところです。

手作りのささやかなこの行事が今年で十二回目となりました。

当初の目的である東京同窓会参加者も三百人台から六百人台にまで伸び同窓会会場には後輩達の若いエネルギーが弾け輝く姿が溢れるようになったのです。このことは驚きでもあり喜びでもあります。

今お金万能主義にとりつかれてしまった社会が破綻し、百年に一度の大恐慌と向き合っています。大切な価値観を見失い行動の多様化した時代だからこそ個人と個人の心のかよいあいを大切にしなければと思うのです。優しさものとの交わりを汚すことなく積極的に対話しながら変わってゆく場本当の優しさがある場に、ネットワーク社会の一つの場、として同窓会(一紅会)もという小さな集まりがこれからどうかわってゆくのか、難しいけれどもゆるやかに変化してゆくのか、子供の将来を気遣うように見守るつもりです。朝日新聞の天声人語に興味深い数行がありました。嵐山光三郎著「同窓会奇談」のあとがきに「人々が同窓会に出かけて交錯した時間の糸をたぐり寄せあうのは昔の自分に出会ふという無為の作業である。」の文に続いてキャノンの脱税事件にふれ経済界のトップであるM氏とO社長は同郷、同じ高校、家族ぐるみの結びつきだった。そこにごめいた黒い影、故郷、旧友、優しさものとの交わりは、心地よいゆえに、難しい。と書かれている。どう読み、どう受けとめるか。考えさせられます。

記念講演会について

50回記念のスペシャル・イベントです。いつもの再会・歓談に加え、講演も聞けて、「得した、ためになった、出てよかった」と思っていただければ幸いです。

講師

- ・山梨 or 甲府中学・一高に何らかの接点・縁（ゆかり）があり
 - ・十分な知名度があって
 - ・多くの人に共通の関心事をテーマにできる人、が条件。
- “超多忙”の医師 日野原重明さんをお願いしました。

演題

「石橋湛山先生と私 & 生涯現役 100 歳を生きる」の“ダブル・ヘッダー”です。

幾多の人材を輩出した母校ですが、石橋湛山先生はその代表として、われわれ同窓生の深く誇りとするところ。特に、指導者たるにふさわしい政治家を失い、「総理の品格」が問われる昨今、偉大な言論人、大きな政治家として、石橋湛山先生をしのぶ思いは強いものがあります。

その石橋湛山の主治医を務めたのが、聖路加国際病院の日野原重明さん。ことし 10 月で 98 歳。現役最高齢、かつ最も有名なお医者さんでしょう。ベストセラー「生きかた上手」など著書も多く、ご存知の方が多いかと思います。

昭和 32 年、病に倒れた石橋総理の治療に当たり、以後 16 年間、主治医として親しく その人格、識見、哲学にふれ、政治家としての 強くかつ清々しい生き方に感銘を受けたという。

もう一つのテーマは健康・長生き。ことしの同窓会にご出席の皆さんの平均年齢は 65 歳くらい。日野原先生のお歳までは、まだまだ 30 年以上、これからです。元気に長生きしましょう。

石橋湛山 翁

1884 年（明治 17）生まれ

1902 年（明治 35）県立山梨県第一中学校卒業

札幌農学校でウィリアム・クラーク博士の薫陶を受けた

大島正健校長に出会い、Boys, be ambitious! の精神に触れる。

大島正健先生彰徳碑（写真は元の場所）の Boys, be ambitious! の英文は湛山の書。除幕式にも参加した。

父・杉田湛誓は 身延山久遠寺第 81 世法主



早稲田大学卒業後、1911 年（明治 44）、東洋経済新報社に入社。徹底した民主主義・自由主義・平和主義を唱え、ジャーナリストとして活躍。戦時下でも、一貫してリベラルな論陣を張る。

戦後、政界に入り、昭和 31 年 12 月、自由民主党総裁選で岸信介を破り、第 55 代総理大臣に就任（12 月 23 日）。精力的に全国を遊説するが、直後の昭和 32 年 1 月 25 日、脳梗塞に倒れる。2 か月の休養を要すとの診断を受け、「私の政治的良心に従います」と潔く退陣を表明。2 月 23 日、わずか 2 か月で総理大臣の座を去った。

その後、徐々に健康を回復。自らが築いた日中関係の悪化を憂えた湛山は、昭和 34 年 9 月、中国を訪問。周恩来首相と会談し、日本が東西冷戦終結の架け橋になろうという「日中米ソ平和同盟」構想を提案した。周恩来はこれに同意。「両国民が手を携えて極東と世界の平和に貢献すべきである」とする「石橋・周共同声明」を発表した。

翌年、日中貿易が再開され、昭和 47 年、日中は国交を回復する。湛山はこれを見届け、昭和 48 年、88 歳で世を去った。その 16 年後、ベルリンの壁が崩れ、冷戦が終わる。世界に先駆けて冷戦終結を唱え、日中国交回復の道筋をつけた石橋湛山。卓越した先見性、歴史観の持ち主であった。

（顔写真は「石橋湛山 写真譜」東洋経済新報社 より）

担当 長田 弘之（昭和 46 年卒）

甲府中学・甲府一高東京同窓会 50 回記念講演

日 時 2009 年 7 月 11 日 (土) 総会終了後
会 場 東京会館 9F ローズルーム

演 題

石橋湛山先生と私 & 生涯現役 100 歳を生きる

97 歳の現役医師 日野原重明氏。

3 年先 (100 歳!) までの予定表を持ち、診療・教育・執筆・講演… と、忙しさは“年を追ってスピードを増して”いる。

75 歳以上の元気な人を「新老人」と呼び、新しいことを創 (はじ) めようと提唱。自ら音楽劇の脚色やアンサンブルの指揮に挑戦し、人々に夢と希望を与えている。著書「生きかた上手」は 120 万部のミリオンセラー。

講演は年に 150 回。睡眠は 5 時間。週に 1 回は徹夜で原稿を書くが、翌日は「達成感で気分はさわやか」だという。

石橋湛山先生との接点は…。

そして、ご専門の立場から、「元気に機嫌よく長生き」する方法を語っていただきます。

講 師

医師 日野原重明 先生



【プロフィール】

1911 年 山口県生まれ
1937 年 京都帝国大学医学部卒業
1941 年 聖路加国際病院内科医
内科医長、院長を歴任
現在 聖路加国際病院理事長、名誉院長
(財)ライフ・プランニング・センター 理事長

予防医学の重要性を指摘、成人病を「生活習慣病」と呼ぶ
2000 年 「新老人の会」結成
スローガンは ①愛すること ②創めること ③耐えること
2005 年 文化勲章受章

【著書】

生きかた上手 (ユーリーグ)
死をどう生きたか 私の心に残る人びと (中央公論新社)
十歳のきみへー 九十五歳のわたしから (富山房インターナショナル)
いま伝えたい大切なことーいのち・時・平和 (日本放送出版協会)
ササッとわかる「長生き人生」の優先順位 (講談社)
100 歳になるための 100 の方法 未来への勇気ある挑戦 (文藝春秋) など多数

三世代インタビュー

—平均年齢50歳の親・子・孫がそろって一高生—



松本到着時の記念写真

強行遠足のいでたち

敬 制服・制帽・脚絆・わらじ(松本まで行くつもりなら3足必要。長野に入ると途中で売っていた。)

元 制服の上着・白のトレーニングパンツ

岳 ジャージの上下

過去50年を振り返るだけでなく、これからの50年も見据えたい、という思いから現役一高生に照準を合わせてスタートしたこの企画。できればその父か母も一高卒業生で、さらにその祖父か祖母も一高(甲中)卒業生で、もって欲張って平均年齢「50」歳の三世代を探そうという無謀な試みへと発展した。その結果、ここに登場していただくことになったのが、甲府市在住の、神宮寺敬氏、元氏、岳氏。平成二十年十一月一日、甲府のホテルで、お話をうかがった。

(敬称略 内容はインタビュー当時のもの)

◎ 卒業はいつ

敬氏 昭和十二年 甲府中学卒

元氏 昭和五十四年 甲府一高卒

岳氏 甲府一高一年生

◎ 強行遠足について

敬 全国でも有名な強行遠足を楽しみに甲府中学に入学する人が多かった。学校側も一大事業であった。メダル線(注1)で一年は上諏訪、二年は川岸、三年は小野、四年・五年は塩尻まで行くと銅メダルがもらえた。松本まで行くと特別賞優秀賞がもらえ二十四時間歩けるところまで歩く。松本まで行けば「イイ男」といわれた。部活仲間三人で必ず松本まで行くことを堅く約束したため五年で松本に行かれた。私は、五年間銅メダルをもらい、さらに松本まで行ったため金メダルを頂いた。完全踏破できたことと松本まで行かれたことが一番の思い出。松本で記念撮影をして貰った。

元 小諸まで三年間行ったが写真は撮らなかつたためない。受験が総合選抜(一高・南高・西高)だったので強行遠足に行きたいという強い思いがあつて一高を選んだということはない。しかし、入学後強行遠足への思いは徐々に大きくなった。

今年、PTA保健体育副委員長として親の立場で参加。事故が起きないよう交差点全てにボランティアが立ち保体委員長・副委員長は全線巡視し、細心の注意を払った。学校側と父兄を合わせ徹夜で七〇〇人ほどが携わった。

岳 今までは野辺山までの五十キロであつたが、今年から距離が伸びて小海までの七十五キロになった。男子夜十時出発、女子明け方出発。夜中を走るの全校生初めての経験。

元 お守りは、クラス・部活・個人的にももらった。現在は、お守りをもったお札にりんごをあげ、またそのお返しに女の子がアップルパイを焼いて渡すようだ。どこでももらった



神宮寺 敬氏（昭和12年 甲府中学卒）

りんごをあげたのかにより本命か義理かに分かれるらしい。（臼田が本命）
敬 強行遠足で松本まで行った経験があるからという理由で、元さんが一年の時から保健体育部長を頼まれ、三年間部長を務め全線巡視した。
元 従来女子は、平日の通勤時間帯に須玉小を出発し道路を朝横断するため交通渋滞になってしまいクレームがきた。そこで平日は出来なくなり土曜に男子・日曜に女子スタートとなった。その結果父母のお手伝いもしやすく、高原野菜のトラックも少ないため安全であった。私たちの頃は、トラックが多かった。今年は距離が伸びて初めての強行遠足であったので、いかに安全に行うかが第一であった。



神宮寺 元氏（昭和54年 甲府一高卒）

元 夜中に野辺山の手前で空を見た時、満天の星に感動した。岳に先に言う面白くないので、寒いからとだけいった。岳が帰ってきて感想が「星がきれい」と言ってくれたのでヤッター。一年目で気が付いてくれたことがうれしかった。
敬 甲府中時代は、十一月三日（明治節）と決まっていた。十一月三日は、昔から雨が降らないといわれていた。上諏訪・茅野では霜がおりていた。

◎ 日新ホールについて

岳 昔の建物は建て替えられ、今は、職員会議・部活の合宿などに使われている。学食は校舎内にあったが昨年から一時閉鎖している。お昼は購

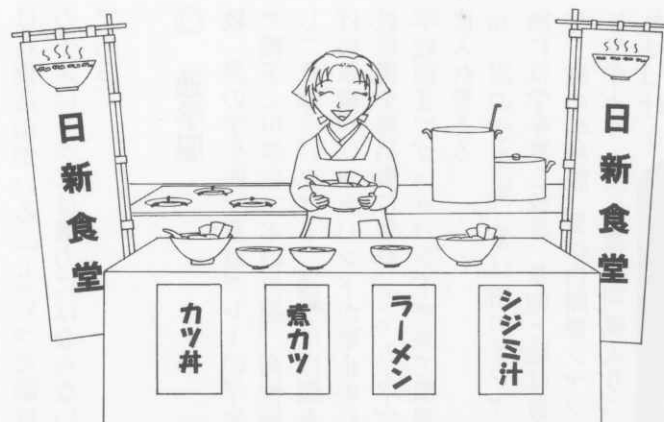


神宮寺 岳氏（甲府一高一年生）

買でパンを買うか、弁当持参。教室で食べている。
元 三校時〜四校時の休み時間に日新ホールに食べに行っていた。早弁の生徒達のために一回営業する。ラーメン（麺が硬くゴムラーメンと言われていた）・チキンライス・天丼・カレーライス・Aランチ・Bランチ。一階男子・二階女子と分かれていた。
敬 学食はなし。お昼前の三・四校

時には空腹を我慢できず、花輪さん（当時正門西にあったが今は無い）で大福・あんぱんなどを食べる（大福・あんぱん三個で五銭）。昼には業者が学校にパンや饅頭を売りに来た。靴屋・万年筆屋も来た。革靴のため通学路の砂利道を二十日も歩くと底が減り修理が必要となった。万年筆は

英習字の授業で使用。
元 以前の日新ホールはなくなり、建物が全然違うので懐かしさはあまり感じない。（敬さん元さん時代の建物はほぼ同じで、上履きは使用していなかった）



カット 藤原俊男（昭和46年卒）

七月十一日懇親会の会場に「日新食堂」が再現！
驚くほど薄いナルトの「ラーメン」を始め、「チキンライス」「カツ丼（千切りキャベツとソース）」「煮カツ（豚カツ卵とじ）」「鳥のモツ煮」「しじみ汁」などが供される。

◎ 修学旅行について

敬 修学旅行は、四年で奈良・京都へ行った。東海道線で行った。積み立て一円。学費が一ヶ月三円五十銭（当時でも高額。今の私立の学費並みではないか。）だったので、合計五円もらい五十銭はおこづかいにした。四年で積み立てが終わるが親に言わずに五年からは一円五十銭がおこづかい。

元 広島・岡山研修旅行。

岳 二年で沖縄へ行く予定。

◎ 部活について

敬 卓球部。強かった。ラバーの貼っていない板だけのラケットだったが、西山梨郡の大会で優勝したこともある。

元 放送部 強行遠足をテーマに作った作品が、NHKのコンクールで県内一位になり関東大会に出場。部室を建て替えた時に記録がなくなってしまうことが残念である。

岳 文学部に入っている。一高祭に向けて作品を制作する予定。

敬 昭和十年四年生の夏に初めて甲子園に出場した。甲信越では、長野の佐久中・新潟の長岡中が強くなかなか勝てなかった。その後、甲神静になって初めて優勝し、山梨で初めて甲府中が甲子園に行った。その時ちょうど甲府中列まででた。甲子園では、くじ運がよく対戦相手が青島中学であったため一

回戦は勝った。ピッチャー五味、ショート奥村、ファースト柳沢とメンバーに恵まれた。その後ピッチャーの五味は、甲府中五年でプロ入り。甲府中では初めて。名古屋金鯱軍（今の中日）に入団。

◎ 応援練習について

敬 運動場で練習をしたが、五年の団長は髭をはやしても怖かった。団長は羽織・はかまを着用。

元 講堂で入学後二日間だけ練習。声が出ていないと怒鳴られた。団長は羽織・はかまを着用。

岳 特別な応援練習はない。入学時応援歌と校歌を覚えるようにとCDが学校から配られ、終わったら返却する。放課後、生徒会が中心になり練習をする。団長のなり手がいないため今年から応援団はなくなった。

（そのため今年五月に開かれた同窓会にはOBが応援団を務めた。）

◎ 一高を選んだ理由

敬 相川小学校で一番だったし、兄の尊が甲府中学だったので、当然自分も甲府中学に行く、行けると思っていた。当時は尋常小学校の上に尋常高等小学校というのが二年あって、中学受験で落ちた人は尋常高等小学校で勉強して一年後、二年後と、二回受験するチャンスがあった。

元 家から近い。当時でも強行遠足は

魅力で夜中を通して歩いてみたいと思った。強行遠足の話しは、父からも聞かされていた。総合選抜だったので、自分がどんなにがんばっても自分の志望校に行かれるとは限らなかった。何もしようがなかった。しかも受験科目は三教科で倍率は102だったのであまり受験という緊張感はなかった。

岳 昨年から総合選抜ではなくなったので、自分から一高に行きたいと希望し選んだ。強行遠足も魅力であった。（敬さん・元さんが、通学も近くて便利だと吹き込んだところもある。強行遠足も経験させたいと思った。）

◎ クラス編成

敬 一クラス五十人、全校生徒は四クラスで二百人。七人ずつ七列に後ろから成績のいい順に並ぶ。席は、一年間ずっとそのまま変わらない。同級生には甲府中から松本高校に行き山岳部に入り井上靖の小説「氷壁」のモデルになった人、甲府中学の校歌を作った三井甲之（みついくこうし）（注2）の息子、また一級下には甲府一高校歌の作詞と応援歌「お御崎さんの神主が」を作った上條馨（注3）がいた。

岳 七クラス、女子は四十人中十七人ぐらい。女子生徒には、昔から変わらない制服に魅力がなく学校を選ぶ際あまり人気が無いようだ。

英語クラスは、一クラスで入試時に別枠。特進クラスは入学時に、「希望する・

しない・先生にお任せ」のアンケートをとり四十人の希望者で一クラスとする。授業の単位数が違うので一年で希望したら三年間変更できない。国公立大を進学目標にしている。そのため私立の推薦は受けられない。

元 学校説明会時の、昔から変わらない「伝統のある学校である。卒業生には石橋湛山がいる。」といった話は今の子達にとっては魅力にはならない様である。

◎ 通学服

敬 黒の学生服。夏はグレーの学生服で帽子（中学は二本の白線、高校線なし）には白いカバー。通学には編み上げの革靴。ブックバンドが禁止のため教科書を風呂敷に包む。しゃれもんは、学校前までブックバンドで来て風呂敷に入れ替える。

元 黒の学生服。夏は白のYシャツ。胸には学年章と校章。革靴と靴は自由。岳 黒の学生服。夏は白開襟シャツ（胸に学年カラーの校章の刺繍入り）、名札はつけない。かばんは、自由。

僕は、自転車通学なのでデイベック。自転車にも名前はつけない。



◎ 三人の中で

自分が一番だと思うこと

元 当時を見ていないから比べられないが、なんにおいても父を越えられない。厳しい時代を生き抜いてきた当時の人にはかなわない。とにかく高校時代は楽しかった。今も戻るとしたら高校時代。

敬 長い人生を振り返ると戦争時代は避けられない。学業より何より天皇陛下のために命を捧げることが男子の本懐と信じていた。あまりにも厳しい時代を生きてきたので、戻れるのなら戦争の無い時代。二度と戦争をしてはいけない。

◎ 印象に残っている先生は？

元 一年の担任土屋松雄先生。十年間甲府一高に在職された。授業中も生徒指導も非常に厳しかった。

岳 今は特に変わった先生はいない。

敬 後に一高の先生になった、三枝茂雄は数学嫌いの同級生。授業中よく幽霊・お墓の絵を描いていた。卒業後アトリエを作りたいので七十万用意して欲しいと頼まれ、同級生一人二万ずつ合計六十万集めた。後十萬は自分で出すことを約束し、その代わり毎月一枚ずつみなに絵を描くことを約束。私は龍の絵を描いてもらった。鯉が滝を昇り最後に龍になる。青は、銅の青さび、赤は紅、金は金粉を使って描いてある。

閑話休題

— 三枝先生と龍と制服のこと —

神宮寺敬さんの話に登場した三枝茂雄先生は昭和40年～48年、甲府一高で教鞭を執られた。私たち昭和46年卒業生にとっては最も思い出深い先生の一人であり、とにかく逸話には事欠かない先生であった。美術部の顧問として、また芸術選択科目の美術の先生としてはもちろんのこと、全く接点はないのに深く影響を受けたと述懐する仲間は数知れない。惜しくも1989年に亡くなられたが、1994年に県立美術館で開催された「妖魄華気・三枝茂雄展」では、鋭く美しい墨線、気魄に満ちた描線で、ゆらめくような妖気や情念をも表現し、深遠な世界を創りあげたと紹介されている。そんな三枝先生と敬さんが甲中で同級生だったとは…。思いがけない偶然に座は大いに盛り上がり、ここには掲載できないような若かりし頃のお話をたくさんうかがうことができた。件の龍の絵も、敬さんの自宅の居間に飾られているのを撮影させていただいたが、三枝先生も同級生と毎日一緒にいられて、さぞかし喜んでおられることだろう。

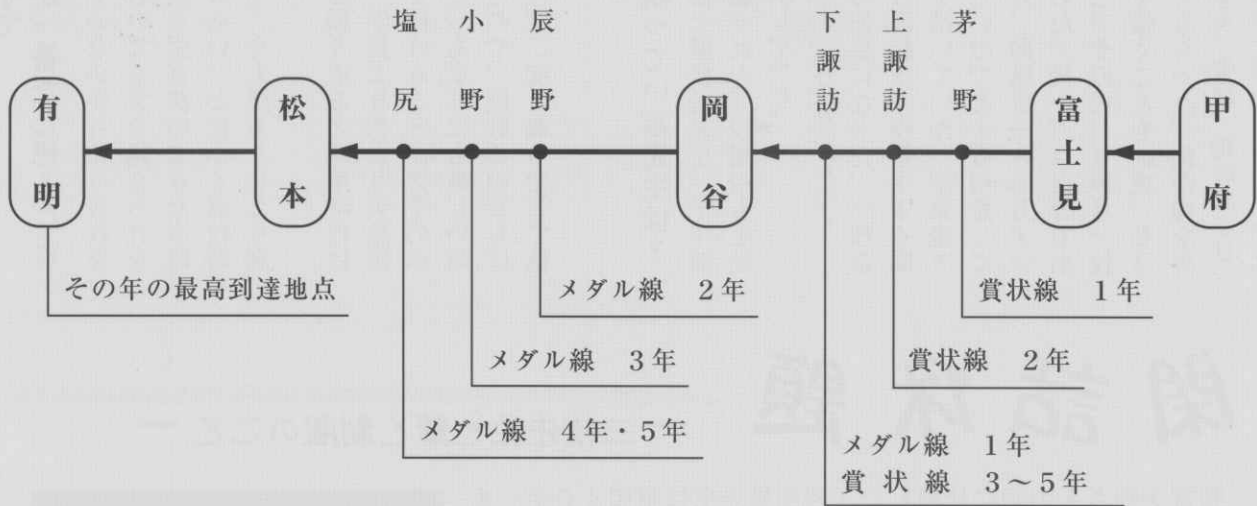


もう一枚は、46年卒仙澤清美さんが在学中に三枝先生に描いていただいたもの。これがまた因縁めいた話になるが、11月1日にインタビューを行った翌日、OB 強行遠足に参加し、ゴールのおおむらさきセンター近くの日野春駅から電車に乗ったとき、仙澤さんから、日新鐘で三枝先生の記事を取りあげてくれないかという提案があった。昨日の今日である。驚きを通り越して、2つ返事で、彼女の肖像画を掲載させてもらうことになった。

ちなみに、この制服だが、甲府一高第1期の女性（28年卒）であり、一紅会の初代会長でもある渡邊圭子さんによると、女生徒たちの公募により決まったとのこと。残念ながら、渡邊さんのデザインは不採用だったそうだが（もし、採用されていたら、どんな制服になっていたのだろうか…）、この制服の赤いネクタイから「一紅会」の名をとったと聞く。仙澤さんが宝物のようにしている絵の制服が最近の女生徒には人気がないと知ったら、三枝先生は何とおっしゃるだろうか。

注1 各学年別到達地点により賞状が授与される賞状線と銅メダルを授与されるメダル線があった。気象状況等により地点は変更された。銅メダル5個獲得すると卒業時に金メダルを授与された。

昭和11年 メダル線・賞状線 図解



注2 文学者、歌人、右翼思想家。根岸短歌会に属し伊藤左千夫に指導をうける。

注3 在校生、卒業生、職員から歌詞を募集したところ職員であった上條馨の作詞に決定。実際御崎神社の神主であった。

● 成績評価

敬 一教科でも四十点以下があると落第となる。甲・乙・丙の三段階評価。落第する人は、多い時で二百人中十人程いた。落第生は家の事情ということでは他校へ移る者もいた。

元 落第点は三十点以下。三学期制。五段階評価。

岳 二期制のため、通知表はまだいっただいてないが五段階評価だと思う。今のところテスト結果だけ教えてもらった。

● 一高を卒業してよかったこと

敬 何処に行っても活躍している同窓生が多かったのかもしれない。

元 時代が違っていても同窓生というだけでつながりが持てる。

岳 在学中だから良く分からない。

● 文化祭について

元 キャンプファイアー、フォークダンスを楽しんだ。

岳 キャンプファイアー、フォークダンスはない。最終日は、後夜祭ではなく「ありがとう祭」といい六時で終了。

インタビューを終えて

祖父も父も通った高校を岳さんがどうして選んだのか、それが一高であるだけに最も興味のある点だったが、インタビューが終わる頃には、ごく自然で、当たり前のことのように思えてきた。言葉で伝えなくても、二人の生き方や後姿を見て一高にあこがれ、行くべくして一高に行ったという気がしてならない。元さんが強行遠足の夜空の星に感動した話をあえて岳さんにせずに、本人から、星がきれいだったと聞いてうれしかったというのは、大いに共感できる。そう、一高の素晴らしさは説いて聞かせるものではない。子は親から、後輩は先輩から、その生き様を通して、感じ取っていくのであろう。四世代インタビューも不可能ではなさそうだ。



50年前の強行遠足

これ程歴史的に続く『強行遠足』の思い出は、卒業生それぞれの胸に懐かしさと共に印象深く刻まれていることと思います。

千曲川沿いの、まるで毛糸玉で色どられたような山々、紺色のスクールセーターに白いトレパン姿の乙女、互いに肩を組み足を引き摺りよるめきながらも正門をくぐる強者達、校舎三階の窓から身を乗り出し声援で迎える仲間、その脇で我ながら感動した記憶、次々に光景が浮かび上がります。

東京同窓会五十回記念の今年は、思いきって五十年前にタイムスリップし、当時の強行遠足を振り返ってみようということになりました。今から五十年前（昭和三十四年）は、我々当番幹事が小学校入学の年でもありました。さて、その年の諸先輩の中に、第七十回強行遠足記念誌に寄稿された寺坂俊子様がいらつしやいました。お話を伺ううちに、なんと五十年前の山梨は、八月に七号、九月に伊勢湾台風と相次ぐ上陸によりかなりの被害を受け、残念なことに強行遠足は中止となっていた事実が判明しました。長い歴史上中止が三回あり、その一回がまさに五十年前の三年生の時だったというわけです。当時三年八組の担任で物理の恩師であられた寺田和男先生を囲み、三八会（さんばちかい）と名づけたクラス会が、十六年前の甲府同窓会当番幹事の年に結成され、以来ずっと続いているそうです。そして寺坂様は、ほぼ毎年参加されているそうです。なんと素晴らしい絆でしょう。そうしたことから、早々に寺田先生にご連絡をして下さり、中止の年の大変に貴重な様子を綴った、先生ご自身の書簡を掲載させて頂くことが出来ました。

寺田先生と寺坂様はじめ同級生の方々、ご協力有難うございました。それではご一緒に昭和時代の「まぼろしの強行遠足」に、タイムスリップ!!

まぼろしの強行遠足

今から十六年前に甲府一高の百二十周年記念の総会があり、私共は当番幹事でした。卒業以来三十二年ぶりに会う恩師や友人達と心に残る楽しくも有意義な時を過ごしました。この年は、多くの卒業生を送り出してきたあの校舎が建て替えられた年でもあり、また、三八会（さんばちかい）が始められた年でもありました。昭和三十五年卒担任寺田和男先生の三年八組のクラス会です。以来、恩師寺田和男先生をお迎えして毎年行われています。地元の同級生が毎年交代で幹事をして下さり楽しい年中行事のひとつになっていきます。今年も北巨摩方面の散策を中心に石和温泉泊で二十名近くが参加し盛大に行われました。甲府から北巨摩への車は強行遠足で通った信州往還をゆつ



三枝 茂雄 画

強行遠足 70 回記念誌『歩け、心のかざり』より

寺坂 俊子（昭和35年卒）

くりと走ってくれました。運転して下さったHさんの優しい心配りが皆に通じ、車内では強行遠足の話がたくさん出て盛り上がりました。

三八会の興奮も覚め遣らぬ九月のある日、甲府一高東京同窓会の記念誌担当の方より五十年前の強行遠足についての原稿依頼があり、今夏のクラス会でのことを思い出しました。車中でも石和温泉でも、強行遠足の話は何度もあったからです。

そこでまず、甲府のHさんにお尋ねしてみました。

「ほうけえ、俺もよく覚えていんじゃないね。だけど大きい台風があつて、うちの葡萄棚が水浸しになった事はあつたなあ。強行遠足はどうしたずらかあ。あつたのかなあ。台風で大荒れだった

河原を歩いた覚えはあるんだよ。」

松本市に住むOさんは、「私は、国界橋までだったさ。歩くのえらくてねえ。白い上下の体操着を着て友達とゆっくり歩いただよ。帰りは汽車に乗ってほっとしたさ。強行遠足が無い時なんてあったつけ、覚えてないじゃね。」と。

山梨市のHさんは、「私は、体があまり丈夫でなかったから一度も歩かなかったのよ。でも台風で家の壁が落ちた事はあったね。あの時学校は休みだったのかしら。強行遠足はどうだったかねえ。」

南アルプス市のYさんは、「三年の時、大きい台風があり開国橋の橋桁が落ちたり、葡萄園が被害に遭ったりしたよね。私は、石和の方へ手伝いに行きたさ。甲府のどこだかに集まり一高生が大勢でトラックに乗り手伝いに行きたよ。勤労奉仕だね。今でいうボランティアかね。えらく喜ばれてね。ワイガヤガヤ大勢でやったから仕事が捗ってね。おやつにふかし芋やもちこしやスイカをごちそうになりお土産まで頂いてさ。でも強行遠足は、どうだったかね。覚えてないね。」と、それぞれが思い出して話してくれました。

当時、甲府市内の我が家も台風の直撃を受け、瓦が飛んだり塀が倒れたり

して大変だったが、強行遠足にはどうしても繋がりがせん。友人四人と富士見まで歩いた事は覚えていますが、あれは、一・二年の時だったかもしれませぬ。

その後も、三八会の友人たちが、当時の台風により自宅の葡萄棚や近所の家屋が全壊、隣人で命を落とされた方もいた事、我々の時代に大町まで歩いた人がいた事など、色々とは知らせてくれました。

時を同じくして、かねてより寺田和男先生にお願いしておりました、昭和三十四年の強行遠足についてのご返書を戴きました。先生のお手紙により我々生徒の疑問は、みごとに解決されました。やはり三年の時は中止でした。八十二年という長い歴史上中止が三回あり、そのうちの一回だったのです。目の前が明るくなりました。寺田先生有難うございました。

三年の時は、残念ながら強行遠足は中止でしたが、各人が貴重な経験をした年でもあったと思います。思いも寄らないお電話で、私もこの記事を書かせて頂き、甲府一高の縦横の人々との繋がりを強く感じ有難いことと思っています。この繋がりは私の無形の財産です。恩師寺田和男先生を始め三八会の友人、一高に学んだ多くの人々を思い、そして松本まで歩いた兄を偲びつつ甲府一高に学んだことの喜びをつくづくと感じております。一高のこの良き伝統が末長く続きますよう祈りつつペンを置きます。



山梨県立博物館にて、三八会（さんぱち会）
左から6番目 寺田先生、右から2番目 寺坂様



寺坂さんの手紙文中の説明
石和のホテルにて「ビジョ達に囲まれて…」



寺田先生の書簡



前略、お便りの件について思い出するままに記述してみました。

朝7時頃のこゝと、家族4人揃って朝食をとっていました。突然風雨が吹き込んできて、何がどうなったのか一瞬わからず、見上げると天井・屋根が抜けて空が見えるのに気が付き驚きました。昭和34年8月13日朝、台風第7号の襲来でした。屋根は壊れて棟材・瓦など西側の広場に散らばっていました。更に近所の惨状を見てから台風の恐怖を知り身がふるえる程でした。夏季休暇中でしたが教職員研修講座の最終日でしたので当日のことは忘れられない程です。(市営西田町住宅居住)

甲府駅裏愛宕山近辺から和田峠へかけて風の通り道に沿って被害が大きかったようです。更に諏訪口へ抜ける道すじである葦崎-武川村では土砂崩壊・洪水の被害を受けました。

(理科年表より)

台 風	月/日	死者	不明	負 傷	住 破	浸 水	耕 地	船 舶
台風第7号 (甲信)	8/13~14	188	47	1,528	76,199	148,607	74,169	111
伊勢湾台風 全国(九州を除く)	9/26	4,697	401	38,921	833,965	363,611	210,859	7,576

学校は夏季休暇中でしたが、被害を受けた生徒らの住居への救援活動に当たることになり、クラス・クラブ・地域単位で行われました。私はサッカー部顧問でしたので、部員生徒らと積翠寺古湯坊(保坂宅)の崩落土砂の片づけに当たりました。尚、続いて9月26日の伊勢湾台風が来て、釜無川すじの信州往還の道路の改修工事でもできず寸断され被害を受けたのでした。

以上の様な状況下でしたので学校では強歩大会を中止せざるを得なかったのです。強歩大会に代わる行事をしたかどうか? 50年も経ちましたので記憶が定かではありません。

残念なことに3年時に強歩大会が中止になり不撓不屈の一高魂育成の行事ができませんでした。日々の学校生活で培われた心情は深く胸に刻み込まれていて、今日活躍の原動力となっていることと信じています。

不備

H20.9.25

寺坂俊子様

寺田和男



...

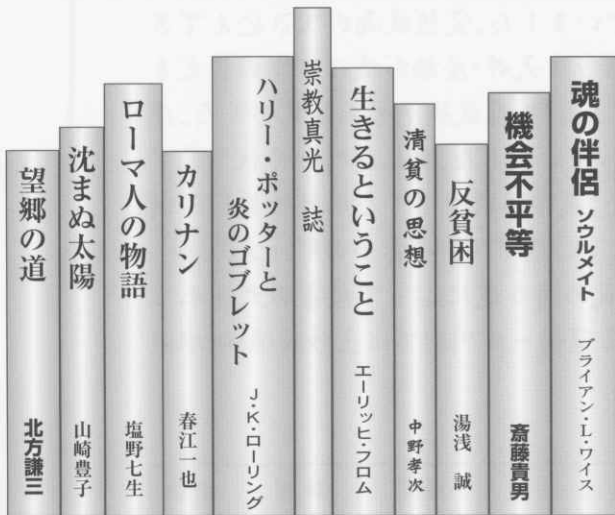
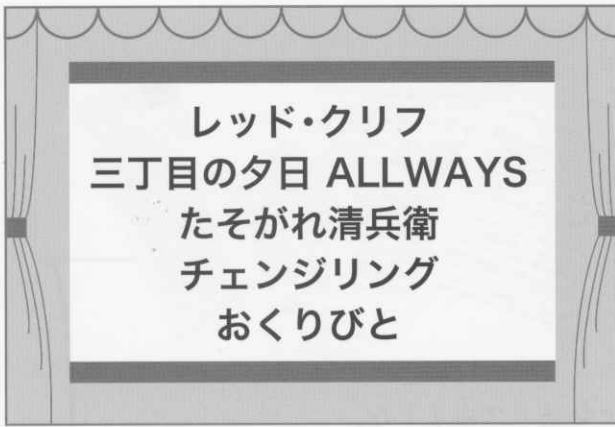
卒業生 50人に聞く

現在、「人生五〇年」の昔とは、比べものにならない程寿命は延び、今や日本の平均寿命は男性七十九歳、女性八十五歳にまでなりました。

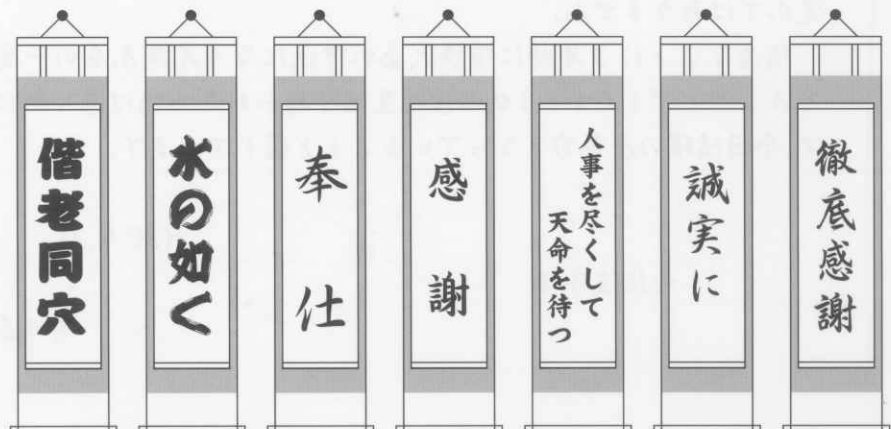
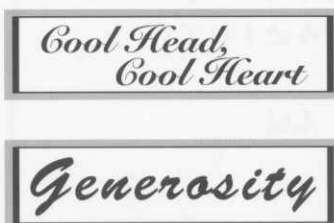
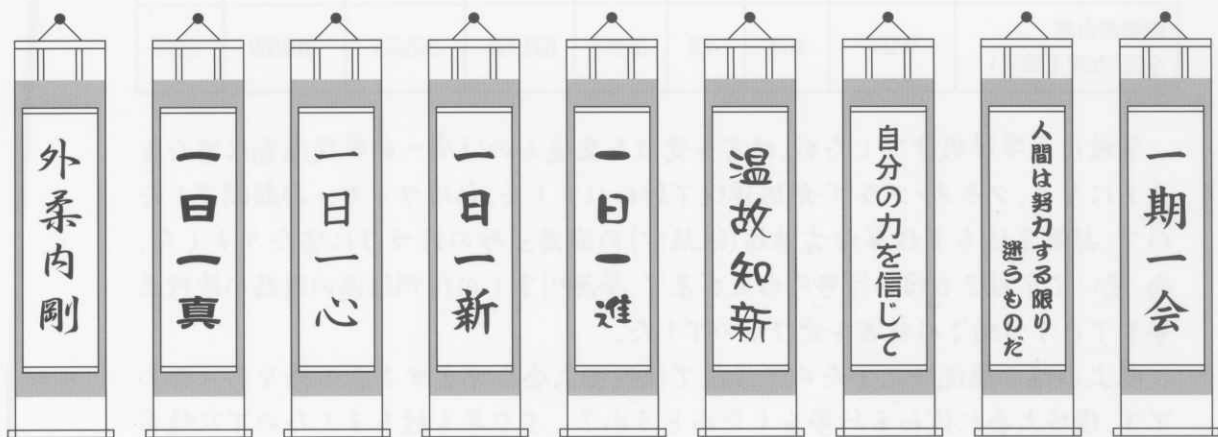
人生の半ばを折り返し、六十歳の、会社で言えば定年を迎えられた後、どのようにお過ごしでいらっしゃるのでしょうか。

同じ学舎から巣立った、先輩諸氏の『今』を聞きたい、という多くの声に、昭和四十年卒、現在六十二・三歳の方にアンケートをとらせて頂きました。

最近見た映画や読んだ本で、薦めたいものがありましたらお聞かせ下さい。



座右の銘をお聞かせ下さい。



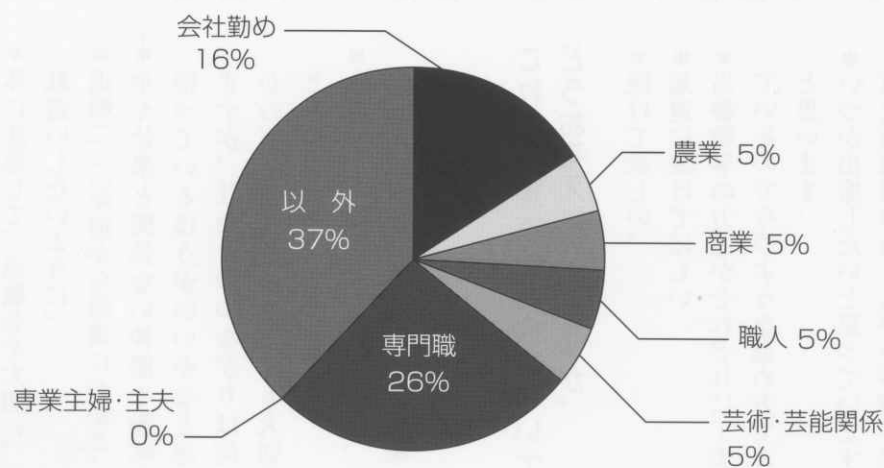
『現在の仕事』について

対象年齢が六十二・三歳ということもあり、まだ現役でお仕事に就いていらっしゃる方がほとんどでした。半数ぐらいの方は定年に関係のない、農業や商業、職人、芸術・芸能関係、専門職の方々でした。

それ以外と回答された方は、退職後、年金生活を送り趣味を楽しんでいらっしやいます。また年齢からいって親の介護世代にもなります。相談員や議員として地域に貢献していらっしやる方や、学習塾経営や非常勤講師をなさっています。

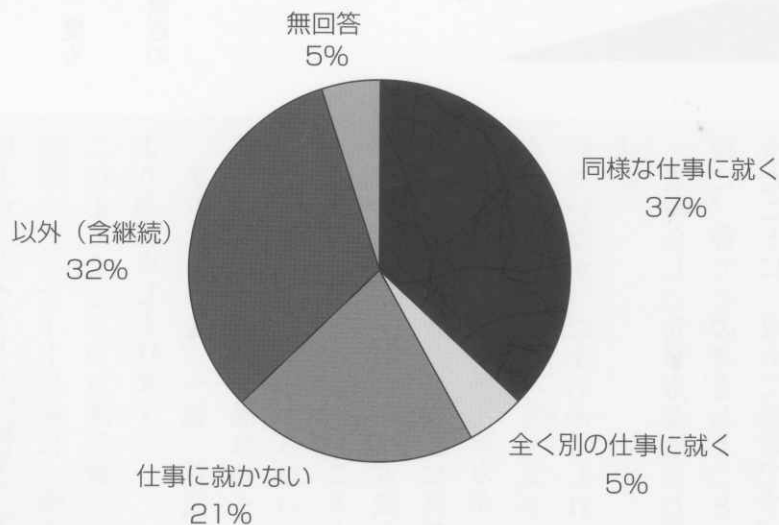
現在、どのようなお仕事に就いていらっしゃいますか

	会社勤め	農業	商業	職人	芸術・芸能関係	専門職	専業主婦・主夫	以 外	合計
%	16%	5%	5%	5%	5%	26%	0%	37%	100%
内容					・チャイナペインティングスクールを自宅で	・税理士等		・退職し、家庭にいる(母の介護と趣味の世界) ・相談員 ・東京都区議 ・年金生活、無職 ・学習塾経営で専門学校等非常勤講師	



今後どうしようと考えていらっしゃいますか

	同様な仕事に就く	全く別の仕事に就く	仕事に就かない	以外 (含継続)	無回答	合計
%	37%	5%	21%	32%	5%	100%
内容		・ボランティア活動	・退職後の生活を楽しまたい等	・自営業 ・呉服屋 ・職人 ・農園経営		



『今後どうしようと考えていらっしゃいますか』について

今の仕事を継続するや、同様な仕事に就くが七割近くありました。仕事に就かない方は、退職後の生活を楽しみたいとおっしゃっています。仕事に就かないで、ボランティア活動をしたいと思っている方や、今までとは全く別の、農園経営を考えていらっしやる方もいます。

これから退職を迎える方への
アドバイスをお願い致します。

*退職二三年前から準備にかかる。

*我流を通すこと。

*退職後体調を崩す人が多いので、数年前より退職後のことを考え、趣味の世界を広げたり、体を鍛えたりするといった思いました。

*奉仕と家庭と仕事をバランス良くする。

*高度成長に乗って、右肩上がりの発想をしてきた癖を消して、低成長の社会に、貢献すべきである。

*人生やつと半道中、九十歳まであと二十六万時間、がんばって生きましょう。

*先ず、他人のことを考えての言動、対応を心掛けて頂きたいです。自己愛でなく、利他愛が大切だと思います。そして、幸福になることを願っています。

*趣味を持つ。人の和に定期的に加わる。

*何事にも一生懸命に取り組みたいと思います。(アドバイスではありません。)

*「収入の如何を問わず、働ける仕事を持つこと」だと思う。

*退職なさる前から、退職後にする仕事でも、楽しみでする事でも少しずつ、手がけておくことが大切。

*退職と同時に人生を一回リセットする。
*体に注意して。退職金を大切に、無駄遣いしないように。

*退職二三年前から準備にかかる。

*全く仕事と関係ない仲間や趣味を持つているほうがいいかなと思います。が、社会とのつながりは何らかの形で持つていることも大切だと思えました。

*ちよつと遅いかもしれませんが、若いうちから、老後の準備と趣味の習得を。

これらの東京同總會について、
どうお考えになりますか。

*続けて欲しい。

*地道に続けてほしい

*当番幹事の方達がそれぞれ工夫している。で今のような進め方ではないと思います。

*いつか出席したいと思っています。

*東京は山梨の会とちがい多種多様という独自性があるので、独立性を高めて維持して欲しい。

*より多数の方々の参加を望みます。

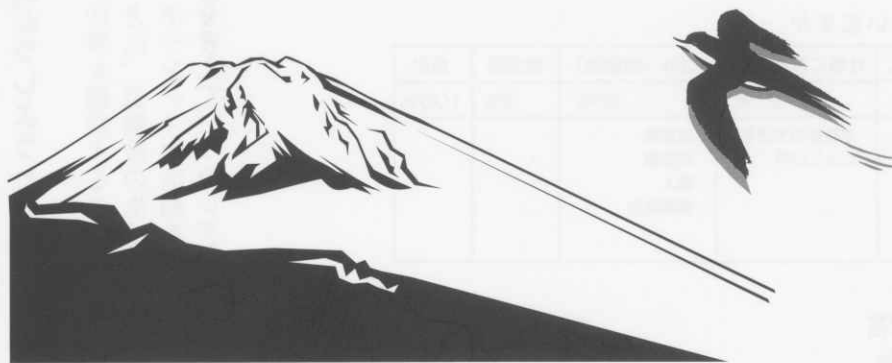
*一部の人達だけが大変な思いをして続けておられますが、あまり無理であればやめても良いと思います。5年に一度位でも良いかと・・・

*継続

*一年に一度仲間に出会えることを楽しみにしております。ずっと続けていたきたいと思っています。

*申し訳ないのですが、今まで一度もうかがったことがないので。

*なかなか参加できませんが、最近の学校の状況、近況などを。



以上が、アンケートの結果です。

突然のアンケート依頼に、快くこたえてくださった諸先輩に心よりお礼申し上げます。

アンケートを、一枚一枚読み進め、皆様の直筆に触れるうちに、自分でもよく分からないのですが、何か熱いものがこみ上げてきました。こんなにも誠実に、後輩の聞きたいことに真摯に答えてくださる先輩方がいらっしゃることに今まで気が付いていなかったからかもしれません。

素晴らしい先輩方が培った高校に、嘗てその身をおくことできたことに、改めて感謝です。



歴代記念誌・一部内容紹介

過去の記念誌に眼を通すと、それ等全てを再録したいと思う充実した内容を含み、ピックアップは困難を極めました。

しかし、ページ数に制限があり、寄稿文中、卒業生総てに共有されるべき思い出の種々相に焦点を当てることに致しました。

以下はそれ等の基準に従ってのアレンジです。

創刊号

ご挨拶

校長 廣瀬重雄

卒業後幾星霜を経た今、その母校は私たちの心のふるさとであり、生涯にわたる師、友、仲間とのふれあいを求めて回航する母港でもあります。...

「発行を祝して」

甲府市長 山本米彦
(昭和29年度卒)

歳を追ひ発展する「在京同窓会」が今度は同窓会たよりを発刊し、より活発な情報交換を目的とする意義ある企画を立てられ、心から喝采をお送りいたします。...

第二号

「一紅会」発足される!!

甲府一高の「一」、女性、校旗、女子制服の蝶ネクタイ、を現わす「紅」から付けられました。...

女性ネットワークの会発足に寄せて

「一紅会」会長 渡邊圭子

政経混迷の情勢の中で今、女性が感性をキラキラと輝かせて魅力的に生きているように見えます。一高を卒業された女性も昭和二十八年からすでに四千名を超えました。...太先輩の方々が築いてこられた伝統を引きついだ女性たちが家庭に社会に一層輝きつつける存在であるように一紅会がお役に立てる事を願っております。...

81年前米国プロ野球選手になった先輩!

斉藤邦弘 (昭和25年卒)

昨年、野茂投手がロサンゼルス・ドジャースで活躍し日本中を沸かせました。なんと野茂を遡ること80年前、大正の始めにアメリカでプロ野球選手となった先輩がいました。その名は「三神吾郎」明治41年の卒業生です。

米国プロ野球の古いボスターに東洋人らしい人物が写っているのを見た、ノンフィクション作家の佐山和夫氏が興味を抱き、12年の歳月をかけて調査しました。結果、この人物こそ三神さんであると判り、昨秋TBSでその顚末を放送しました。母校野球部の草創時代の話と共にご紹介いたします。

母校野球部は明治24・25年頃に創部しました。当時は用具とて少なく大抵は素手で捕球していました。わずかに捕手がミットを手にし、マスクは剣道の面を代用したこのことです。勿論、技術も拙劣でした。30年代に入りますとこじつこ進歩し、対外試合を行うようになりました。

三神さんの在校時に早稲田大学からコーチを招き、本格的な野球に取り組んでいます。今もユニホームの胸に記す「KOFU」の文字はこの時から着けました。師範学校や甲府連隊チームと対戦し、長野に遠征して諏訪中学との定期戦を始めたのが明治40年です。

三神さんは甲中卒業後、早稲田大学に進み野球部でシヨートを守り活躍しました。明治43年早稲田チームがアメリカに遠征した折、三神さんも参加しました。イリノイ州ノックス大学など対戦しましたが、これが縁で早稲田卒業後ノックス大学に留学し、本場の野球を学びました。最上級生になりますと外国人でありながら

キャプテンに選ばれてチームを引っ張り、俊足・好守・好打の選手として有名になりました。

当時、アメリカの野球は大リーグが黒人選手を受け入れなかったため、別にニグロリーグというプロ野球リーグがあったそうです。ミズリー州のチーム、オールネーションズのオーナーは三神さんの評判を聞いてスカウトしました。三神さんも有色人種な訳です。その時、オーナーから三神さんに宛てた勧誘の手紙が三神家に残っていて、佐山氏の手掛かりとなり幻の東洋人選手発見の決め手になったのです。

日本のプロ野球は創立61年、それより20年前のことですから、正しく日本人プロ野球選手第1号であります。今なら全米各地に日本人が在住し、野茂には通訳や新聞記者が同行していますが、三神さんの頃は何しろアメリカは遠い、遠く異国でした。チームの中で日本人たった一人、広い大陸を汽車で移動、転戦して歩いたというから凄くはありませんか。その奮闘ぶり、パイオニア精神には全く敬服いたします。

明治30年代から大正の始めといえますと、母校はあの「Boys Be Ambitious」を残してくれた「大島正健校長先生」の時代です。同30年代の卒業生の中からは、我が国、近代史に残る傑作を輩出しました。営団地下鉄の創始者・早川徳次、元内閣総理大臣・石橋湛山、東京タワーを設計した工學博士・内藤多仲、元日米文化振興会長・笠井重治、陸軍大将・今村均、海軍大将・塚原二四三、等々です。三神さんも大島先生の教えを受けて、大志を抱き世界に雄飛したのでしょう。

短いプロ野球生活を終えて、三神さんはイリノイ大学の大学院に再び学び、その後、三井物産のニューヨーク支店に勤務しました。戦後は

「イスのコトブキ」の取締役相談役を務められ実業界で活躍されました。元明治大教授・三神修さん、元同窓会長・寺田七男さんは、吾郎さんの実弟であり、兄弟共に母校野球部の黎明期に在籍され、先輩としてその名が部史に記されています。

第四号

同窓会に感謝して

甲府一高校長 雨宮 惇

…三万六千人を超える卒業生によって培われ、脈々と受け継がれてきた百十七年の輝かしい歴史を伝統を励みに、自主自立の校風のもと、「日に新たに」の気持ちで努力してまいりたいと思います。…

日新鐘

備仲臣道（昭和34年卒）

…旧校舎の屋上に上がったことのある人は少ないはずである。それは私たち応援団と屋上に小屋のある天文部の者たち以外には許されていなかった。



画・若尾真一郎（昭和37年卒）

…いまのように車が多くなかったから町は静かで、私たちの発声練習の音が甲府駅まで聞こえたというのが、まんざら嘘の話ではない。「い」という音は出しにくいので不自然な口の形で発声するから「フレィフレィー高」と言っているのがエテコーエテコーと聞こえた。…

第六号

緒方和子（昭和36年卒）

初めて男女とも同じ人生のスタートラインにしていると意識したのは、一高に入学した時。

初めて故郷に気がついたのは、大学時代 東京生まれの友人に帰省を羨ましがられた時。

初めて高校時代の恩師、一高の精神的風土について思いを巡らせたのは、都会で息子たちを育てる難しさに直面した時。

初めて同級生をなつかしく想ったのは、同級生の死を知った時。…

第七号

文・古明地 勝昭（昭和37年卒）

「いま、新たなチャレンジ」

一一〇年前も

今日と同じように

吹いていた古く新しい風。

同じ風を受けて少年たちは

一途な夢と冒険心にみちて

しるべもない遠い道を目指し

たえまなく出発して行った。

幾千もの挑戦の跡を残して。

一一〇年後の今
はてしない時への

新たな出発のために

歳を重ねたものも 少年少女だった

あの頃にみた夢の帆のきればしを

吹きつける古く新しい風にかざして

明日に向かう自分に挑んでゆく。

その夢の帆をはためかせて。

「我が快適チャレンジ精神」

フリーアナウンサー

文化事業「アイデア」主宰 高橋恭子（昭和28年卒）

…昭和25年4月初の女子一期生として入学。制服は？体育は？トイレは？先生方と日々続けられた試行錯誤がまさに我々の規範を創り出していたように思う。…朝礼時上級生の怒濤のような私語のざわめきに驚いたり、毎朝校門に入る私たちに窓に鈴なりで大声でエールを送って来るお兄様方に秘かに心をときめかしたり、女子一期生の毎日は快適試験とスリルに満ちていました。…

—チャレンジの時代—

大島校長と甲中の生徒たち

甲府一高総務主任 大西 勉（昭和34年卒）

ノンフィクション作家、日本ペンクラブ・三田女学会会員、アメリカ野球学会会員でもある佐山和夫氏によって、甲府中学出身の三神吾郎が米国における日本人最初のプロ野球選手であったことが話題の著書『ジャップ・ミカドの謎』で世に広く紹介された。

佐山氏は同著のなかで三神吾郎がアメリカに渡った真の動機を求めて母校甲府中学の後身甲府一高を訪ねた時の感動を次ぎように記している。バス路線から脇道に入って、正門へのまっすぐな道を歩いた。グレーを基調とした四階建てのきれいな校舎だ。中央にたかく、梨の葉をあしらった校章が見える。校門を過ぎて、中央玄関に向かつて歩き進んだときのことだ。私は立ちすくんだ。左側の植え込みの中に、立派な石碑あり、その中に「Boys be Ambitious」とあるではないか。レリーフの人物は、第七代校長大島正健である。佐山氏は、大島校長を通じて伝えられたクラーク博士のチャレンジ精神が三神青年をアメリカに渡らせ、前人未到のプロ野球に向かわせた、という。

三神氏の渡米とアメリカプロ野球とのかわりの真の動機については、氏の結論に委ねるとして、氏が大島校長時代の甲府中学の空気（時代精神）に着目した点はきわめて興味深い。十三年八月の大島校長が在任する甲府中学は、



第7代 大島 正健 校長



インディアナポリスでの試合広告
1916年のものと思われる

佐山和夫著『ジャップ・ミカド』の証（文芸春秋社）より転載

石橋湛山、浅尾新甫、平井好一、中島鼎、小林中、笠井重治、塚原二四三、内藤多仲、斉藤潔、飯田蛇笏、望月春江、小池勝五郎など各界で新分野を切り拓き、旺盛なチャレンジ精神で、新風をおこしたグローバル・スタンダードの傑出した人材を生み出している。この時代についてじっくり研究してみる必要がある。十九世紀の後半から始まった本校の歴史が三つめの世紀に第一歩を刻まんとした新たな挑戦を課題とするいま、大島校長時代の甲府中学から学ぶものはきわめて大きいはずである。

若き日の石橋湛山のチャレンジ

石橋湛一（湛山氏 長男）



元内閣総理大臣
石橋湛山(明治35年卒)

石橋湛山の生涯は大きく分けて、
(一) 学生及び大学卒業時代、
(二) 言論人時代、
(三) 政治家時代、の三つになる。

石橋自身では何を考えていたか判らないが、私共から見るとその各々について極めて強いチャレンジ精神に基づく努力が払われたことは明らかである。茲では(一)と(二)に関することを少し紹介してみる。石橋は、山梨県立第一中学校を明治三十五年（一九〇二年）三月卒業して、その六、七月頃上京、第一高等学校を受験することとした。もともと寺の子弟であるから宗教家になるのは宿命と考えていたが、単なる僧侶になるには余りにアンビシャスであった。医師をもって人の肉体を救い、宗教をもって精

神を救う道を選ぼうと考えたのである。併し高等学校の入試は石橋にとっては体質的に馴染むものでなく、本気で入試勉強もせず美事にこのチャレンジは失敗した。それでも「もし本当の医道に進んだら相当の医者になっていたろう」と後日「湛山回想」に書いている。併し本当に医者になったら、後に言論界や政界で活躍した石橋湛山は出なかったと考えられる。明治四十四年（一九一二年）東洋経済新報社に入社、同社刊行の「東洋時論」誌の編集を担当した。東洋経済新報社は経済を専門とする雑誌社であるが、石橋は大学で哲学を専攻したので経済学を勉強するべく、独学で経済書を読み、その初めに読んだ本の一つがセリグマンの「経済学原論」であった。この本（原書）は相当分厚い本であるが、これを通勤の電車の中で完読したということの後々話題になった。長幸男氏は後に、石橋の経済思想は、原書でコッツと自學したA. スミス以降の古典経済学の真髄を土台として、J.S. ミルやJ.M. ケインズの理論を受容し、マルクスの思想的インパクトをも受け止め、レッセ・フェール型資本主義を修正し、「新自由主義」を主張したと評した。正に新進鋭時代の経済学へのチャレンジであった。

第八号

はぐくまれたもの

一紅会会長 五十嵐 節子

：女子二期生の私たち、当時の社会感覚からは「権威ある男子校の牙城に進入」したともいえる少数派だった。でも気負いはなかった。格別

な気負いもなくいられるところに、新しい共生の時代の風を感じとっていたのだろう。

エポックメイキングな時代の母校は、開かれた道をさらに広く遠く切り拓いて行こうとする私たちの意思を、育んでくれたのである。

日に新たな教育の鐘

大村 紘一郎 高校校長

：全国的にも、養護学校などでの「分離教育」から普通学校での「統合教育」への移行が徐々に進みつつあります。教育についても、「肢体不自由な人も人間、幼な子も年寄りも人間、外国人も日本人も人間、みんなみんな同じ人間、人間は平等でしかも人間であるということだけで高貴なのだ」という原点に立つことが「日新鐘」の願いだと考えます。

ジェンダー・フリーと学校教育

小学校教員 雨宮 由里子

：これからは、男女それぞれが性別を超えて、一人の人間として、自分の能力や行動、生き方を広げることのできる社会をつくっていききたい。

ハンセン病と人種

弁護士 山田 雅康

：「悪者の根絶」は二十一世紀を通じての最高の価値であり、国際的に共通するキーワードであったことがわかります。

我々人間がこのキーワードのもとに言語に絶する人権侵害をあちこちで実施してきたことを思う時、二十一世紀を迎えるにあたって、時代の最高価値を体現するキーワードに対しては、一方で冷静な批判検討の態度が必要だと思うの

ある老人ホームで

老人施設ボランティア 矢口百合子

…その年の七月の七夕様の短冊に皆でお願い事を書いた日、Nさんは、早く死にたい、早くコロリと死にたい。と。私達はさんさん迷いましたが、その短冊を笹の葉に取付けました。…この入居された最初の日、誰かれになく何度も言っていました。私が決めて、ここに入ったの。と。

…トイレの介助も、結構です、一人で行けました。と、頑として私達の介護を断わり続けました。Nさん、あなたが、お昼寝のベッドの中で、天井をじっと見ている姿を何度も見かけましたよ。初めて、トイレに行きたいのをお願いします。と言われた時、どんなに嬉しかったか。…一年過ぎたある日、息子、娘さん達がどんなにイイ子供だったかを穏やかな顔で話してくれるNさんが居ました。トイレ介助も、ちょっとだけ手伝わせてね。と言う私に、どうも有り難う、お願いします。と大きな声で答えて下さる様になりました。…今年の七夕の短冊には、きつこう書かれるでしょう。百歳まで生きるからよろしく。と。

第九号

青春して生きる

宮島雅展（現甲府市長）

…HRの時担任の先生が「今日は出席率が高いな」とおっしゃり「俺の贈るこぼしにするか。」と言ってお話を下さったのが以下であります。「君たちはこれから受験をしたり、就職をした

り、いろいろと大変だが自らの腕だけを頼りにしっかり生きて行って欲しい。天は自ら助くる者を助けたよ。ところでサミエル・ウルマンの詩に、青春とは人生のある期間をさすのではなく心の有り様をいう。たくましい意志、ゆたかな想像力、燃える情熱をいう。青春とは積極的に取り組もうとする勇氣、案易を振り捨てる冒険心を意味する。年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時初めて老いる。というのがある。原文はもつと長いが言いたいのは今のくだりだ。我々の校歌にもあるが、諸君は日に新た、また日に新たと努力して、いつまでもいつまでも、青春して生きて行って欲しい。以上！

表紙のこぼし

39年卒 吉岡美穂子（旧姓 平林）

不安に満ちたまなざしを投げかける少女、私達の17歳の頃の表情を描いてみたかったのです。私達、いえずなくとも私は未来への不安、不思議な切なさを抱いていました。そしてそれから数十年、中年期から、そろそろ初老にさしかかった今、仲間達はどんなまなざしを投げかけているのかとアレコレ考えています。

モロッコのフェズを訪ねて

小林牧子

ミラノで乗り継ぎ、一昼夜かかってカサブランカに、さらにラバト、メクネスを経て、フェズに辿り着いた。

モロッコは北アフリカの西の端にあり、アルジェリア、チュニジアと共にマグレブ（日の没する国）と呼ばれる。

幻想的な風景を描く砂漠、迷路さながらの深いメディナ、顔をヴェールで覆い隠した女性たち、アララーの神に譲られてモロッコの人々は月の時間を生きているという。…

第十号

一億個の撤去のために

竹越久高

地球上に一億個を超える対人地雷が埋められているという。もつとあるのかも知れない。…山梨の地から地雷撤去に貢献している人がいる。私の中学の同級生で、山梨日立建機株式会社の社長、雨宮清氏は、カンボジアに出張して、松葉杖の子供たちが大勢いるのに驚いた。…一億個を取り除かなければ安心して生活できない。人道に背く地雷の被害にみんながまず関心を寄せ、何か地雷撤去の応援ができないか考えたいものだ。

近況について

メイスン夏樹（中山）
アメリカ・フロリダ州

人間の一生の最終章にさしかかる頃には、人は自分なりの生き方に納得する。そしてもう一度人生をやり直すことができた、と考えてもやはり同じ道を歩むのだらうと思う。…私も今さらこのアメリカでと思いながらもお茶を始め。…日本から一番遠いフロリダに立派なお茶室のある森上美術館・日本庭園があるからだ。

…お庭は、こいの泳ぐ池、小さな滝やせせらぎ、石庭もある本格的なものだ。美術館は日本の庶民の生活を中心にしたもので各種の教室もありアメリカ人の見学者でいつもいっぱいだ。…床の間付きのお茶室に階段教室があり、見学者はお手前を見たり、説明を聞いた月一回はお菓子を食べ、お茶を飲むことができる日もある。…アメリカの日本である森上美術館・日本庭園へ通う日々が私のフロリダ生活だ。

高校時代

成澤武四

…思い出として汽車通学が印象に残ります。我々の学年は全県一区の時でした。山梨県中から各中学校の優秀？といわれる人達が甲府一高に通っていたのです。…さて、さて汽車通学のもう一つの楽しみは他校の生徒（特に女生徒）と知り合う機会が甲府の人達よりはるかに多かった点です。今の高校生と違い、当時は女生徒を遠くから眺めるだけでワクワク、ドキドキしたものです。今日もあの娘に会えた、明日も会えるかな？と胸を躍らせたことを今も懐かしく思います。…

第十一号

すべてのものには名前があるのだ！

医療法人南山会 峡西病院

理事長 川崎光洋（昭和41年卒）

すべてのものには名前があるのだ。これは初めて言葉というものの存在に打たれたヘレン・ケラーが発見した真理です。

第十二号

親父のこと

五組 須藤 襄

掌の上を流れる冷たいものと、もう一方の掌に愛情を持って繰り返し綴られた mother の語が稲妻のように結びついた瞬間、彼女の魂は目覚め、光が射し込み、ここは希望と喜びに溢れたのでした。しかも言葉を知らぬ苛立で壊した人形のための後悔と悲しみの涙をも初めて知ることになります。

私たち誰もが他人と交流したい、自己を表現したいと言う衝動を抑えることができません。この衝動は目や耳を通して外からくるのではなく、私たちの内部から不可避的に湧き上がって来るものであることはヘレン・ケラーの例が良く示しています。

これこそ人間が作り出すものすべてを貫く「個」と「全体」の論理です。「個」をいくら集めてもそれだけでは「全体」になりえません。「個」が全体を構成しうるのは、「全体」が自己を細分化し、「個」の中に潜んでいるからなのです。

「個」の中に潜んだ「全体」は物乞いに身をやつた王のように、あるいは有限の肉体に閉じ込められた魂のように本来の自由なる「全体」に戻ろうとてあがき苦しみます。その必然の結果として他の「個」の内部に潜んだ自己の分身である「全体」と共鳴し、自己を突き動かす、相互に交信し、「全体」を再構成しようとし、

このようなダイナミックな関係があるからこそ、「全体」の化身である「個」は、「全体」を再構成できるし、私は、あなたを愛することが出来るのです。



第十三号

作者 根津 正

……住みなれた街の樹と風は
夕空をうつして光る

今 甲府に向かう列車に乗れば
甲斐駒の稜線の向こう側は

この心を朱に染める光でいっぱいになるだろう

しばらく帰っていない山梨はどれほど変わったか
卒業してから行っていない母校はどれほど変わった
ただろうか

それぞれが無我夢中で駆け抜けた時間を
恩師はなんと言ってくれるだろうか

はるか一高までの距離はすでに
この心の中にあり

また一高を出てきてからの時の長さも
この心は憶えている

列車が甲府に着く頃には
わたし達はもう一度

高校時代に戻っていて

これからの時間を大切にするための始まりを感じ
ている

……何かがなければ故郷は遠のく
同窓会で田舎のことを話してみよう

第13号編集長大野陽造氏はじめ編集スタッフの
明確な意図。

氏の4ページにわたる「高精神、三高千恵子医師の随筆と千葉陽子医師がインタビュアーになつての記事」。

お手元があれば再読をお勧めしたい。



世界史の萩原先生。善光寺の方から通勤されていたという噂がありました。ペダルがギシギシ鳴るオンボロ自転車に覆い被さるように乗って校門を入って来られる。ちやうど本館の校門

虞や虞や汝を如何せん

十組 大森 正

私が高校に入学した時にはまだ親父（貌）が甲府一高に在任しており、なんとなく気まずい思いもありましたが、それまでどこへ行っても貌の息子ということで周囲の方々から可愛がられていたせいか、特に大きなブレッシャーはありませんでした。

一年時には音楽部に所属していましたが、親父の勧めで美術の道へ進路変更。翌年、親父は山梨高校へ配置換え、新たに美術学校時代の後輩で、奇才として有名な三枝茂雄先生が赴任してこられました。…私が幼少のころ、須藤家では祖母が稲作を営んでおりました。私もよく田植えに連れていかれたのですが、雇い人の中に何人かのお兄さんがいたことを記憶しています。実はこのお兄さん方は甲府一高の美術部の生徒で、何と学校を公欠で我が家の田植えを手伝っていたとのこと。当然、田植えの後には家で酒盛りくらしいのことはやっていったことでしょう。裏春日のキャバレーで親父の付で飲んだなどということを言った先輩もおられるほどですから。…

高校時代の思い出

十二組 正岡 由美子

…教師になって三十数年、定年まで四年となりました。…一木先生のごことで忘れられないのは、東京オリンピックのこと。日本中が夢中になっていたバレーボール決勝のテレビで劇的な勝利を飾った日本。その後のHRで「僕はテレビをあまり見ないので…」の一言に絶句。でも一木先生は、真面目な研究者タイプ。きつと数学の勉強をされていたんだと妙に納得したのを覚えていています。…

〈いま・ここ〉を離れて

―市ヶ谷で山梨の文化に酔う―

菊地 健（昭和46年卒）



講師 守屋 正彦 氏（46年卒の“トップリーダー”）

甲府一高三年時の文化祭。クラスの女子たちが発案して、数人の男子に自分たちのセーラー服を着せて、仮装行列に参加することになった。

いの一番に私のところに要請が来た。数人の女子に囲まれ、「お化粧してセーラー服着るんだけど、やってくれない」と迫られた。自意識過剰で劣等感に囚われていた私は、廻りの世界にひどく鈍感になっていたので、二つ返事で引き受けてしまった。私の次に彼女たちから頼まれた同級生から、「お前があんなに簡単に引き受けるから断れなくなったじゃないか」と後で非難された。

一紅会の記事を男の、しかも甲府在中の私が書くのは、よく考えると不自然だ。今回も二つ返事で引き受けたが、あの時の女装と何か繋がりがあるのだろうか。中学の同窓生でもある一紅会幹事から頼まれたとはいえ、やはり固辞すべきだったのだろうか。

前日までの天気は余り思わしいものではなかった。しかし土曜日の外濠辺りはよく晴れ、土手の桜にはまだ一片の葉もなかったが、すれ違う女生徒たちの表情も和らいで明るく感じられた。

頼まれなくとも今回の講演には上京するつもりでいた。講師の守屋正彦氏は同級生だ。彼が芸術学の博士号を取って筑



ふるさと甲斐の国の中世文化に思いを馳せて…

波大教授になるといいうのは全くの意外だった。（しかし、それは私とのつきあいが浅かっただけで、彼は高校時代から山梨県の美術家と付き合いがあったらしい。）しかもその守屋氏が山梨の中世における「素晴らしい文化」を語るといいうのだ。ちょうど数日前、ある新聞のコラムに〈いま・ここ〉という言葉があった。コラム自体は「レキシヨ」と呼ばれる「歴史」好きの女性たちについて、彼女たちの「歴史に興味がある」というその「歴史」は、〈いま・ここ〉の情報環境の中でどれだけでもしるく通俗化しているかが問題なものであって、学問としての歴史とは違う、しかしそういう世間に共有されている「歴史」とも虚心に向かい合わなければならぬ、という内容だった。

〈いま・ここ〉。この言葉で、私は改めて講演内容に懐疑的である自分に気づくことができた。守屋氏の講演をどこかで冷笑しようともくろんでいる自分がある。

(こういうところが、同窓生、同郷人の悪いところか。)

もちろん、いまの山梨のどこに「素晴らしい文化」があるのかという疑問もある。しかしさらに言えば、新聞のコラム氏とは別の意味で、私たちは(いま・ここ)に囲まれている。囲まれているというのは正確ではなく、むしろ(いま・ここ)でしか生きられないのだ。そしてその(いま・ここ)で、私たちは目先のことに追われ、右を向きお世辞を言い、左を向き悪態をつき、右手で掴み、左手で投げ捨てる、そんな生活を送っているのだ。

山梨の「文化」を信じられぬのは、私(いま・ここ)に囚われているからだ。(いま・ここ)を離れたところになら、歴史も文化もないのかもしれない。そう思うと、私の疑念は消え、むしろ同窓生守屋氏の講演を心待ちするようになっていた。

講演は一紅会幹事、西野公子さんの司会で始まった。彼女が、これから美術史を語ろうとする守屋氏が一高時代応援部の部長だったことを紹介すると、三百四十余名の同窓生で埋まった会場が沸いた。さらに同時に落語研究会創設メンバーの一人でもあったと、場内はさらに大きくどよめいた。

場内が暗転し、スポットライトが守屋氏に当たって講演が始まる。彼が幾分低めのぼそぼそした口調で語り出すと、一転水を打ったように静かになり、全員で彼の言葉待った。



晴れやかに謝意——飯田一紅会会長

共に古今和歌集の選者であった壬生忠峯、凡河内躬恒(おおしこうちのみつね)が甲斐に滞在したことからはまり、連歌は、倭建尊が筑波山を詠んで「筑波の道」と称されるが、それを詠んだ場所は甲斐酒折の宮であるし、それに答えて連歌俳諧の祖となしたのは甲斐の火焚きの翁であったと、講演は始まった。旧塩山市市街地にある標高五百五十メートルほどの塩山(しおのやま)は古今集以来多くの歌人に詠まれ、「塩山蔭絵」のデザインとして多くの工芸品にみられた。

平安後期に甲斐に土着した清和源氏は、やがて甲斐源氏となって日本各地で活躍する。また鎌倉往還を通じて禅宗もいち

早く流入し、山岳禅の西の拠点としての大和村栖雲寺には日本有数の前庭始め、質の高い晋応国師座像がある。時宗では甲府一連寺は最高位である遊行上人を数多く輩出し、恵林寺を開いた無窓国師の甥である春屋妙葩(しゅんおくみょうは)は甲斐の生まれで、禅僧の最高位である初代僧録(寺院の管理と人事)となった。等々。守屋氏の「素晴らしい甲斐の文化」は、まだまだ続いた。

残念ながら、カラー写真を意図したレジュメは、文字が少なく、守屋氏が言及したさらに多くの固有名詞を、私はほとんど覚えていない。従ってこれ以上内容を紹介できない。

(いま・ここ)を離れると、こんなにも豊かに文化に溢れた山梨に会える。守屋氏が主張されるように、山梨には確かに誇れる文化があったのだ。

講演後、二、三の質疑応答があった。長野県諏訪上社神官守屋家との関係を開かれた守屋氏が、開口一番「ポール・モリアの子孫です。」と答えると、会場は一瞬にして凍り付く。落研部員としての氏の素質が窺えるこの出来事で、会は終了となった。(ポール・守屋IIもりやIIモリア《蛇足》)

続いて行われた懇親会は、一紅会会長飯田富美子氏の挨拶、東京同窓会会長井上幸彦氏の乾杯で始まった。

高校卒業以来の同窓生に会った。最初は名前さえ思い出さずにいるが、アルコールが入り、大声で近況を伝えあっている内に、顔の形や声や話しかたが十代後半の青年に変わっていった。「なんだお前、ちっとも変わってないじゃんか」と



朗々と乾杯の首頭——井上東京同窓会会長

つい叫んでしまうのだった。

みんな自分たちの話に夢中で、七月東京同窓会幹事長四十六年卒中嶋氏の挨拶も、五月第一二九回同窓会幹事五十二年卒諸君の「百年に一度の不況」アピールも、ほとんど聞き取れない。

おしゃべりはおしゃべりのまま、聞き上手は聞き上手のまま、女性とばかり話したが、同じ人とはばかりいる人、あつちこつ挨拶ばかりする人、元を取るんだと料理が並ぶテーブルを離れないやつ。七十になっても八十になっても、みんな高校の時もそうだった、多分。それが同窓会の醍醐味だ。

(いま・ここ)の自分と、(あの時・あそこ)の自分。「どちらともそれほど悪くはないよ」同窓生がそう感じさせてくれた。

こういう機会を与えてくれた一紅会の皆さんに感謝しながら、会場を後にした。

第12回「一紅会」主催春の講演会

中世のトップリーダー

～甲斐の国、その素晴らしい文化～

日 時 : 平成 21 年 3 月 7 日 (土) 13:00～14:30

会 場 : アルカディア市ヶ谷

講 師 : 筑波大学教授 守屋 正彦氏

中世の甲州力 トップリーダーの活躍

壬生忠峯や凡河内躬恒ら歌仙が滞在した甲斐の国は、古代に、日本武尊が「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と歌い、火焚きの翁が歌を返した「連歌発祥の地」である。古今集の賀歌「志保の山」は都人に親しまれ、遙か遠くより歌の地を想い、硯箱、手箱、文台、太刀拵えなどに見られる蒔絵意匠(図1)の傑作が中世には数多く制作された。

平安後期には清和源氏が土着。三組の阿弥陀三尊像(韭崎、願成寺ほか)が武田氏領に、安田氏の奉納になる大日如来をはじめとする密教像が塩山放光寺に伝えられ、優れた京文化の受容が認められる。中世に入ると鎌倉往還を通じて禅宗がいち早く流入し、塩山向岳寺には国宝の「達磨図」(図2)が伝来し、わが国禅宗の幕開けを飾る象徴的な逸品として貴重である。その頃、元寇を予感し、「立正安国論」で警鐘を鳴らした日蓮(図3)が身延に草庵を開き、以後その地に築かれた久遠寺は聖地として信仰されていった。

南北朝にさしかかる頃、甲斐出身の夢窓国師(図4)とその法嗣たちがわが国の禅宗の体制を確立していく。足利尊氏とともに京都の南禅寺、天竜寺、相国寺などを拠点に、諸国に安国寺を置き、古代の国分寺のような布教機能を整備した。甥である春屋妙葩(図5)はさらに京都の五大寺院を束ねて五山文学を興隆させ、禅籍を出版して布教に努めたのであった。その五山文化を芸術の粋に高めたのは竜湫周沢(武田氏)、義堂周信、絶海中津など恵林寺ゆかりの禅僧たちであった。

また甲斐は東国において仏教文化の交差する要衝であった。西天目といわれる丹波の高源寺とともに山岳禅の拠点が形成され、東天目大和村栖雲寺にはわが国有数の質の高い普応国師の肖像彫刻(図6)が伝えられた。時宗もまた優れた肖像彫刻を遺し、甲府一蓮寺は最高位である遊行上人を数多く輩出し、優れた往時の文化を今に伝えている。

武田家のもとで篤く保護されて開いた仏教文化。甲斐出身のトップリーダーがわが国の中枢で活躍した時代であった。

当日配布の案内チラシ



図1. 塩山蒔絵硯箱

「志保の山差し出の磯
にすむ千鳥」
中世の和歌を主題とした
蒔絵の傑作。

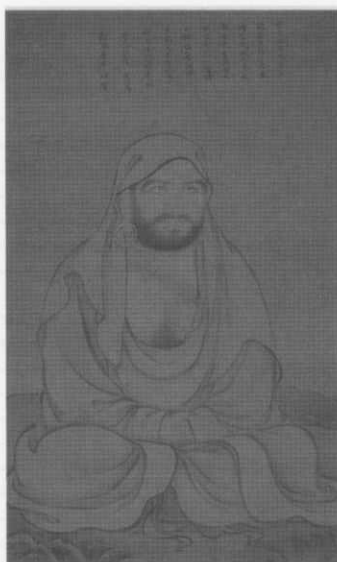


図2. 国宝達磨図

(塩山、向岳寺)

蘭溪道隆は甲斐に滞在し、早くから臨在禅の拠点形成が行なわれた。



図3. 日蓮上人像

身延に総本山久遠寺のある日蓮宗。宗祖日蓮は「立正安国論」を著して元寇を予言し、襲来したとくに身延に移住。晩年をこの地に過ごした。



図4. 夢窓国師像

足利尊氏とともに日本的な禅宗を打ち立て、諸国に安国寺を建立。法嗣には春屋妙葩、竜湫周沢、絶海中津らが降り、彼等は京都五山の中心で活躍した。



図5. 春屋妙葩像

夢窓国師の甥。甲斐の人禅宗僧の最高位である初代僧録となり、五山文学を興し、禅籍を多数出版。日明貿易の折の幕府外交顧問となった。



図6. 普応国師座像

天目山栖雲寺安置。開山の業海本浄が中国天目山に普応国師を訪ね、帰国後遠溪祖雄が丹波に開いた高源寺とともに東西の山岳禅の拠点を開いた。

広告

目次

ア (医) 社団啓仁会 赤岡整形外科医院 秋山健太郎 協賛者名簿 荒川外科肛門科医院	イ (株) 飯島 割烹石川 一紅会会長 飯田富美子 伊藤・遠藤・高野・野崎法律事務所	ウ 医療法人社団仁誠会 うじはらクリニック (株) うちだ 内田 郁 協賛者名簿	エ (株) エスペースジャパン	カ (株) 甲斐國 (有) 甲斐地所 (株) カコー 産科婦人科 梶山クリニック 川手一郎法律事務所 川野昭雄 協賛者名簿	キ (株) キッツ 樹之下知的財産事務所 協賛者名簿 京島クリニック	ク (株) 協和エクシオ 隈部桂子 協賛者名簿 医療法人ぼすと会 クリニックいもうえ 黒田精工(株)	ケ 景雲荘 (株) 京葉マツヤデンキ (株) 現代建築研究所 小泉久司税理士事務所 甲一東京39会 甲府一高東京43会 甲府一高東京51会 (株) 好楽堂楽器店 (株) コスモエナジー 小林歯科医院 (医) 小宮山会 小宮山外科医院 小宮山勝博税理士事務所 近藤・鈴木法律事務所	コ (株) 岡村製作所 小沢耳鼻咽喉科アレルギー科クリニック 小野歯科クリニック	ク (株) 協和エクシオ 隈部桂子 協賛者名簿 医療法人ぼすと会 クリニックいもうえ 黒田精工(株)	サ 佐々木勝彌 協賛者名簿 サトウ歯科医院 さらしな耳鼻咽喉科クリニック 山日YBSグループ (株) サンリオ	シ NPO法人C&Cクラブ しみず歯科医院 清水洋一 協賛者名簿 シミック(株) (株) ジャステック 昭和29年卒、首都圏在住有志 昭和41年卒業生一同 昭和42年卒業生一同 昭和45年卒業生一同 昭和46年卒幹事会 昭和46年卒協賛者名簿 昭和47年卒当番幹事 昭和50年卒業生一同 新藤歯科医院	ス すぎきネフロクリニック 鈴木歯科医院 (有) スターシップ・コーポレーション	タ 大丸商事(株)	チ 昭和46年卒協賛者名簿 昭和47年卒当番幹事 昭和50年卒業生一同 新藤歯科医院	ツ 昭和46年卒協賛者名簿 昭和47年卒当番幹事 昭和50年卒業生一同 新藤歯科医院
--	---	--	---------------------------------	--	---	---	---	--	---	---	---	--	---------------------------	---	---

医療法人日雄会 高橋医院	54	(有)中日本測量	61	富国生命保険相互会社	66	(株)武蔵乃	62	
高畑精工(株)	61	七沢歯科医院	59	(財)山梨整肢更生会 富士温泉病院	61	武藤内科・胃腸科医院	63	
竹居医院	57	ニ	富士観光開発(株)	61	メ	名大電気工事(有)	59	
武井歯科医院	54	日本出版販売(株)	64	富士急行(株)	66	モ	医療法人日望会 望月内科医院	59
チ	表 3	日本テクノ・ラボ(株)	65	藤沢脳神経外科病院	56	ヤ	薬局もみのき	58
(株)千代田セレモニー	表 3	(財)日本盲導犬協会	56	藤原整形外科	54	津久井胃腸科医院	57	
ツ	57	医療法人社団孝和会能見台パトリア	56	富士見歯科医院	54	ト	東京三一会	56
東京三一会	56	ハ	68	(株)ブティック社	67	神童会(東京三一会)	7	
神童会(東京三一会)	7	畑歯科医院	54	古川内科胃腸科	58	東京三五会	7	
東京三五会	7	花形歯科医院	59	保坂歯科医院	54	東京38会	63	
東京38会	63	(株)早野組	65	堀之内社会保険労務士事務所	59	東京エレクトロンAT(株)	66	
東京エレクトロンAT(株)	66	ヒ	62	マ	58	(株)東京會館	69	
(株)東京會館	69	高齢・障がい者支援の会ひまわりの里	62	前田皮膚科	58	東京さんさん会	表 3	
東京さんさん会	表 3	平井幸男事務所	58	(株)丸十特殊土木	60	東京リベルテ法律事務所	57	
東京リベルテ法律事務所	57	東京芸術大学名誉教授 平野忠彦	56	マルジン薬局	54	とぎわ歯科医院	57	
とぎわ歯科医院	57	廣瀬法律事務所	58	ミ	58	ナ	中込内科クリニック	57
ナ	57	フ	54	南甲府クリニック	58	中込内科クリニック	57	
中込内科クリニック	57	フカサワ歯科医院	54	ミンクマジック	56	(株)中嶋文夫・フラスデー・エイ設計事務所	表 2	
(株)中嶋文夫・フラスデー・エイ設計事務所	表 2	深沢綜合法律事務所	60	ム	56	深沢綜合法律事務所	60	
深沢綜合法律事務所	60							

扉絵作者

久保田二雄画伯

甲府一高昭和三十七年卒。

東京芸術大学を卒業後、東京都内の有名画廊を中心に、また県内では主に県立美術館や「三彩洞」を拠点に活躍している。

〈出陣 風林火山〉をテーマとした今回の懇親会では、本陣となる舞台上に、画伯の手による甲斐の山々を背景に母校を配

した「陣屏風」が飾られる。

春まだ浅いある日、その

屏風絵の元ともいえる作品

「帯那山」(二〇〇五年制作)

を撮影するため甲府市太田町の画伯のアトリエを訪れた。

た。

半纏を羽織り、炬燵のみ

かんを前に、ガラス窓の向

こうの庭の木に集まってく

る鴨(ひよどり)を指差し

ながら「卑しい鳥と書くけ

れど、これがまた可愛いん

だ」と語る姿は、自然をこ

よなく愛す画伯の絵そのも

のだった。

3月 雨上がりの朝 久保田氏宅を訪ねる



編集スタッフのひとり言



●『日新鐘』を創ろうとメンバーが初顔合わせした頃、嫁いだ愛娘が身ごもり、出産までの十ヶ月が『日新鐘』作成の日々と重なった。つわりで苦しむ姿は、この先きちんとしたものを行なうことができるのかと悩む自分と重なり、目立ってくるお腹を抱えて食欲旺盛な姿は、とことん「50」にこだわりの、こんなことも書きたい、あんなことも載せたいと欲張る自分と重なった。そして、予定日を過ぎること二週間、無事初孫誕生……『日新鐘』は予定日を過ぎるわけにはいかないが、完成した冊子をこの手にしたとき、新しい命を恐る恐る抱いた一瞬と同じようにきつと感涙にむせぶだろう。たくさんの人に支えられて娘が母になれたことを感謝するように、数々の困難や苦労にも時間や人との戦いにも、ありがとうと言えるにちがいない。実際、うれしさのあまり『日新鐘』を抱いた写真を配ってしまいそうな自分が怖い。

(西野公子)



●『日新鐘』部会員としてのスタートは、不安な気持ちでいっぱいでしたが、頼りになる友のおかげで何とか形になりました。発行に向けて毎月、新宿で打ち合わせ、考え、工夫して一つのことになり久しぶりに充実した時間を共有できました。取材では偶然、昔の知人と再会し、甲府中学の貴重なお話を伺うことができました。お元気で若々しく、あやかりたいと思いました。

深まった同級生との絆、大切にしたいです。又、会いましょう！

(延命恵美子)

●昨年の一紅会・春の講演会に参加した際、卒業以来三十七年振りに同級生と再会いたしました。その懐かしさと嬉しさの余り日新鐘の編集部会の一員として、末席を汚すことになりました。

その後、いろいろな話題や資料から、改めて多くの卒業生の方々が、多方面に渡り活躍されていることを知り、甲府中学・甲府一高の「素晴らしさ」を再認識するよい機会を与えられたと思いました。

(小川和子)

● ……思いがけず、記念すべき第50回東京同窓会の『日新鐘』の編集に加わることになった。昨年六月より月一回開催された編集会議は、同窓の方々の多才さを再認識する場となった。「青き時代」を共に過ごした友と再会でき、何色かはまだ決めていない老後も楽しくなりそうだ。

(柿沼敏子)

● 『日新鐘』部会の立ち上がりは部会の中で一番早かった。西野編集長の方針は明確で、役割分担もテキパキ。「50回」というキーワードはわれわれにとってチャンスであった。女性陣に混じって私は男性唯一のメンバー。まさに黒一点、他のメンバーから羨ましがられた。同期の甲府のメンバーにも多大なるご協力をいただき、感謝する次第。50回の記念誌編集のメンバーに参画でき光栄、改めて編集メンバーの皆さん、お疲れ様、そして、ありがとうございました。

(清水勝)

● 書くことの苦手な私にとって『日新鐘』は荷が重く「他の係りにすればよかった。」と弱気なスタートであった。しかしこの一年いろいろな方からお話をうかがったり、資料を調べる機会に恵まれ、一高についてより深く知ることが出来大変楽しく充実した一年であった。またたに古く、断片的になっていた在校時の記憶が鮮明になってきた。一高には江戸

時代の甲府学園所である微典館にルーツをもつ長い歴史があること、「日に新たまた日に新た」いや高き望みを持ちて：天地の化育」と意味もわからず歌っていた校歌の中に歴代の名物校長の教え子達への熱い思いがこめられた三つの校是が歌われていたこと、日本に初めて地下鉄を作った人も東京タワーや大阪の通天閣を設計したのもみな卒業生であること：など改めて知り、ますます一高の同窓生であることへの誇りが高まった。

(杉矢利江)

● 東京同窓会五十周年の節目の年に、『日新鐘』のお手伝いをさせていただき、在学していた時には知らなかった、一高の歴史の数々を、四十年ぶりに勉強させていただいた思い出です。

『日新鐘』の鐘の由来、四つの校是の事、元首相石橋湛山が一高出身であったこと、などなど、毎回驚きの連続でした。また、この機会がなければ思い返さなかった当時の記憶を、互いに紐解き合い、母校への想い、同窓の絆も一層深まった思い出です。

(鈴木正恵)

● どんな経験も、人生をより豊かにしてくれるというのを、記念誌担当をさせて頂きながら改めて痛感致しました。一高時代を振り返る時、思い出のシーンばかりにも一瞬に駆け巡ります。けれども時を経た今、同窓会に関わる世代を

超えた、様々な交流のひとコマひとコマは、新鮮で味わい深く、思い出と共に心地良いときの流れを創り出してくれました。ここで得た思いがけない出会いや繋がりは、私の宝物となり、これからの人生の心の糧となることでしょう。

(仲野裕子)

● 記念誌作りに参加できたことに感謝しています。立ち止まらず、振り返らずやってきた毎日の生活、一高時代の若かった感覚を思い起こさせてくれました。月一回通った編集会議会場「景雲荘」に行かなくなるといのが、ちよっぴり寂しく感じます。一緒に仕事をしたメンバーに、高校の時こんな風に付き合っていたら良かったのに、と悔やまれました。

(松木喜美子)

部長の西野さん、声かけや根回し、段取りを有り難うございました。みんな、これからがリセット人生ですよ。



「編集会議に中嶋幹事長を迎えて」2008.12.13. 景雲荘



当番幹事46年卒

幹事長

中嶋文夫

副幹事長

野呂瀬秀樹 清水勝 山下恵子 矢寄裕子 西野公子

事務局

清水勝・西野公子 山下恵子 杉矢健一

広告部会

野呂瀬秀樹 大竹伸一 細田浩

日新鐘部会

西野公子 松木喜美子 延命恵美子 柿沼敏子

総会・
懇親会部会

杉矢利江 小川和子 仲野裕子 鈴木正恵 清水勝
藤原俊男 吉田美紀子 伊佐治尚子 三科敏美
深澤信子 矢寄裕子 小池紀彦 宮下次廣

講演会部会

長田弘之

司会

長田弘之 岡真木

会計・経理

矢寄裕子 中嶋文夫 清水勝

一紅会

山下恵子 矢寄裕子 西野公子

編集後記

各年度、当番幹事が、それぞれのコンセプトを定め同窓会のアクセントとし、記念誌の性格付けを行ってきた。

それ等意識のフィールドに配置された卒業生の寄稿文は読者の心にどのような映像を呼び醒ますのか。

導火線となつて火花を散らし、あるいは精妙な鍵の回転のように音もなく記憶の扉を開き、卒業生の数だけある夥しい思い出を曳き出すのであろう。

遠い記憶を引き寄せ、現在を生きる糧に：と記せば少し大袈裟に聞こえるであろうか？

かつての夢に包まれて至福の一刻を過す縁に：と云えばセンチメンタルに過ぎるだろうか？

いずれにせよ当号が遠い未来に及ぶ本校の歴史、礎石の一つになればと切に願っている。

尚、末筆ながら50回記念『日新鐘』特集を組むにあたり、散逸した記念誌を所有者各位に呼びかけ協力を要請、全冊揃えてくださった飯田富美子一紅会会長には大変なご尽力を頂きました。ここに記して感謝いたします。飯田様のご努力なくして今号の特集は成立しませんでした。

編集協力 松野 互(昭和四十六年卒)

“^{さきがけ} 魁 接点 50年!”

2009 甲府中学・甲府一高東京同窓会

発行日：平成21年7月11日(土)

発行者：甲府中学・甲府一高東京同窓会

編集者：日新鐘記念誌部会

制作・装丁所：有限会社スターシップ・コーポレーション

〒400-0117 山梨県甲斐市西八幡3987-30 TEL.055-267-8022

印刷所：相互印刷株式会社

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1075-2 TEL.055-262-7121